『フェードル』における毒の役割

永井　典克

1　『演劇作法』を読むラシーヌ：『ロドギューヌ』から『ミトリダート』へ

フェードルとイポリットの悲劇は、17世紀フランスで何回も舞台に乗せられてきたが、セネカ以来の伝統に従うフェードルは剣で死ぬことを選んできた。彼女はイポリットを追いかけ、死者の国へ下ろうとする情熱と、自らの罪を後悔する心を同時に持つ人間として描かれることが多く、剣とイポリットの体の上に注ぎかける血は、フェードルが自分の義理の息子によせる恋の情念の表象であった。しかし、ラシーヌはフェードルに伝統と異なる死に方をさせることを選んだ。彼女は「メデがアテネにもたらした毒」によって死ぬ。彼女の死からはイポリットを追いかけていくという愛情は消え、そこには自分の罪を怖れ、苦しむ人間が存在することとなったのだ。伝統から逸脱する毒による自死は、このフェードル像と深く結びついたものであった[1]。この小論では、それまでのフェードルの神話に登場することのなかったにも関わらず、ラシーヌが舞台にもたらしたこの毒に重点をおきながら、『フェードル』を読みかえすことにしたい。

まず、ラシーヌは『フェードル』を書いたとき、舞台上で毒が使われるとき、どのような効果を生み出しえるかということに関して十分に意識的であったということから確かめることにしよう。ラシーヌがドービニャック神父の『演劇作法 *La Pratique du Théâtre*』のページの余白に記した覚書が、そのことを証拠立ててくれるだろう。この覚書は、ドービニャック神父がピエール・コルネーユの『ロドギューヌ *Rodogune* (1647年)』に登場する女王クレオパートルについて意見を述べた部分に関するものである。これによって、ラシーヌが舞台上での毒の使用に関して、いかなる考えを持っていたかを知ることができるのだ。それには、まず問題の悲劇『ロドギューヌ』における毒の表象と、それに関するドービニャック神父の意見を検討することにしたい。

---

[1] 詳細は、拙論『『フェードル』における死の表象の変遷』、『仏語仏文学研究』、第21号、東京大学仏語仏文学研究会、2000年、pp. 3-30を参照。

コルネーユは、この悲劇の筋をギリシアの歴史家アレクサンドレイアのアッピアーノスの著作から得たとしている。しかし、コルネーユは、史実としてのロドギューヌの物語をそのまま舞台に乗せたのではない。彼はいくらかの変更を物語に加えている。この差異にこそ私たちは注目しなければならない。そこにこそ作家の特徴が現れるからだ。事実、ピエール・コルネーユは、「彼自身の創造による挿話」を加えたのでこの戯曲に「愛着」を覚えていると述べているのだ[2]。

差異を調べるために、もとになる史実をまずコルネーユによるアッピアーノスの引用を要約することで紹介しておこう。シリアの王ニカノールはパルティアとの戦争に負け、捕虜となるが、そこでパルティアの王の姉妹ロドギューヌと結ばれる。その後ニカノールはシリアに戻るが、元の妻のクレオパートルに殺される。自分を捨て、ロドギューヌと結婚した夫を憎んだのだ。さて、クレオパートルとニカノールの間には2人の息子セレウクスとアンティオキュスがいた。ニカノールの死後、セレウクスが即位したが、権力を譲りたくないクレオパートルは彼を弓矢で撃ち殺した。また、この恐るべき母親は、続いて即位したアンティオキュスも毒殺しようとするが、罠に気がついたアンティオキュスに逆にその毒を飲むことを強要されて死ぬことになる。

コルネーユは「適切さ」を与えるため、この悲劇の幾つかの挿話を史実から変更しているが、そのうち、次の2つの変更が重要であろう。

1. ニカノールはロドギューヌと結婚していない。2人の息子が彼女に恋心を抱いても、観客を驚かすことがないようにである。観客は自分の亡父の妻に対する愛情を恐ろしいものだと思ったであろう。近親相姦の愛情は私たちの良俗に反するのだ[3]。
2. コルネーユは、ニカノールの2人の息子のうちの1人であるアンティオキュスを、気高い人物にした。彼は、最後に母親に自ら毒を飲むよう強要することなどしない。王である息子が母親に毒を飲むように強要するのは、良俗に反するものに思われた[4]。

1番目の変更の結果、ロドギューヌはクレオパートルにとって、夫を奪い、息子たちの愛情まで奪った憎い敵となった。そのうえ、息子の1人と結婚すれば、ロドギューヌは、彼女より強い権力を握ることになる。嫉妬に狂う母

---

[2] Pierre CORNEILLE, Examen de *Rodogune*, in *Œuvres complètes* (*O. C.*), t. II, éd. Georges COUTON, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1984, p. 199-200.
[3] CORNEILLE, Appian Alexandrin de *Rodogune*, in *O. C.*, t. II, p. 196.
[4] *Ibid.*

親は、恋敵の命令を聞かなければいけなくなるより、息子たちを殺し、彼らがロドギューヌと結ばれることのないようにすることを選ぶ。コルネーユは、クレオパートルの息子殺しに、より強い動機を与えたのである。

コルネーユは「この作品は『ロドギューヌ』というより、『クレオパートル』というタイトルのほうが相応しかったであろう[5]」と述べている。確かにこの悲劇の主役はクレオパートルであった。しかし、彼はこの悲劇に『クレオパートル』と名づけることはしなかった。彼はかの有名なエジプト最後の女王と、この「第二のメデ」と呼ばれるに相応しいシリアの女王を観客が混同しないかと心配したのだ。コルネーユは、作品中、登場人物が彼女を名前で呼ぶことのないようにした。実際、クレオパートルの名前は上演中、一度も口にされることはない。

2 番目の変更の結果、史実とはことなり、アンティオキュスがクレオパートルに毒を飲むことを強要するということがなくなった。このことを少し詳しく見ることにしよう。クレオパートルはアンティオキュスとロドギューヌを招き、彼らの結婚を認め、王位を譲ると宣言する。

> 今や婚姻のことを第一に考えよう。
> 因習に従えば、ここから始めなければいけない。
> 婚姻の誓いのもとで結ばれるために
> まず私の手から結婚の杯を受け取りなさい。
> この杯が、おまえの相手に対して
> おまえたちの愛と、私の愛情の保証となるように[6]。

この杯に毒が仕込まれていたのだ。結婚を許し、王位を譲るという彼女の発言は、勿論、彼らを騙し、安心させ、この杯を手に取らせようという罠であった。アンティオキュスは、最初母親の言葉に騙され、杯を手に取るが、セレウクスが暗殺されていたという報告が届いたことにより、クレオパートルが出した杯に疑いを持ち、試験をすべきだと考えるようになる。女王はこの杯を取ると、自らが試験をしようと言う。

> 私がその試験をしよう。まだ私の怒りが
> なにか恐ろしい効果を生み出すのではと怖れるのか？

---

[5] *Ibid.*

[6] *Ibid.*, acte V, scène iv, v. 1589-1594.

私は忍耐をもって、そのような侮辱を耐えた[7]。

アンティオキュスは、クレオパートルの命がけの行動に騙され、彼女の手から再び杯を受け取ると、疑ったことを彼女に謝罪する。しかし、彼が謝罪しているわずかの間に、毒は威力を発揮し、女王は倒れることになったのだ。従って、クレオパートルは強制されて死ぬのではなく、自らの意志で、ロドギューヌとアンティオキュスに飲ませようとした毒を飲み、死んでいったことになる。彼女は、飲ませようと欲した杯が無害であると騙すために、自ら毒を飲んだのだ。

ドービニャック神父が『演劇作法』で問題にしているのはこの毒のことである。彼によると、彼女が飲むこの毒の効き目がすこし早すぎるのだ。確かに、彼女が毒を飲んでから死ぬまでの間に、アンティオキュスは10行も台詞を言えていない。このように強い毒による死のような出来事は極めて珍しいことであることを考えると、この話は十分準備されていないと神父は主張する。「この毒によってアンティオキュスとロドギューヌから逃れようと思ったときに、クレオパートルは、その毒の強さを説明し、その強さに喜びを覚えていると言わなければいけなかった[8]。」この意見に対して、ラシーヌは次のような覚書をページの余白に記している。

それでも困ることに変わりはないであろう。何故ならば、この毒を飲んだものは即座に死ぬであろうと言った後に、ロドギューヌと息子に残りを飲ませるために、自らその毒の半分を飲もうとクレオパートルが決意することなどあるだろうか？ロドギューヌたちが残りの毒を飲む前に、自分が死ぬことになると彼女は考えたであろう。そうなれば、次の詩句が言われることはない。

あなたを道連れにしようと、彼女は自ら滅びることを欲したのです、

そして、彼女の死から重みが消えてしまう。息子の愛情を信じ、別の機会まで復讐を取っておくべきであった彼女が、強制されることなく（そのほうがより真実らしく、史実でもあったのに）、心から喜んで自ら死んでいくというだけで十分である[9]。

ドービニャック神父とは異なり、ラシーヌは『ロドギューヌ』においてク

---

[7] *Ibid.*, v. 1793-1795.
[8] RACINE, *Annotations de* La Pratique du Théâtre *de l'Abbé d'Aubignac, Paris, 1657*, in *Œuvres complètes, II*, éd. R. PICARD, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1960, p. 991.
[9] *Ibid.*

レオパートルの毒の効果が早すぎるとは思わなかったようだ。毒は、女王が敵にその残りを飲ませるだけの時間を許すものでなければいけない。もし、毒が即効性のものであり、女王がその場で死んでしまったならば、その死から威厳がなくなってしまう。従って、早すぎるどころか、毒は即効性のものであってはいけないのだ。この毒の効き目の遅さによってこそ、彼女の命をかけた復讐の意思の強さを表すことが可能になっていたのである。この遅さこそが、彼女の自死にある偉大さを与えている。毒は死に威厳を与えることができる。ラシーヌのこの注解は、毒が持つこの可能性に気が付いていたことを明らかにしている。

フェードルの場合を考えてみよう。ラシーヌはクレオパートルの死の教訓を忘れていない。フェードルは自らの罪を告白しようと、舞台に登場したとき、彼女はすでに毒を飲んでいた。彼女の場合も、毒を飲んでから死ぬまでに時間がある。この時間の使い方が問題なのだ。死ぬと分かっていながら行動すること、それは彼女たちが命をかけてもしなければいけないと思ったことであり、そこにこそ彼女たちの意志がもっとも強く表出されている。彼女は剣で死ぬこともできたのだ。だが、そうしなかった。イポリットに罪を着せたまま死ぬことはできなかったのだ。彼女はイポリットの罪を晴らそうと欲し、毒を飲んだ。イポリットの無実を訴えようという彼女の意志は死よりも強いものであった。

> 剣がすでに私の運命の糸を断ち切っていたことでしょう。
> しかし、私は疑われた徳が苦しむままにしていました。
> 私は、あなたがたに後悔の念をお話し、
> より時間のかかる道を通り、死者の国へと降りていこうと欲したのです[10]。

クレオパートルは復讐のために、フェードルはイポリットの無実を証明するために、効果の遅い毒[11]を飲む。彼女たちの死は決して軽々しいものではない。その死にはある種の魂の偉大さが備わっている。それゆえに彼女たちは悲劇の真のヒロインとなる。毒によって与えられる時間が、その偉大さの

---

[10] RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, in *Œuvres complètes* (*O. C.*), t. I, éd. Georges FORESTIER, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1999, acte V, scène vii, v. 1633-1636.

[11] 全ての毒の効果が遅いわけではない。ラシーヌ『ブリタニキュス』では剣よりも効果の早い毒が使われている。また、剣で死ぬ場合でも、時間がかかる例もある。ジャン・メレ『マル=カントワーヌ』、バンスラード『クレオパートル』のアントワーヌ、ピエール・コルネーユ『テオドール』のプラシードの死などがその例として挙げられる。

表象を可能にする要素の1つであったのだ。

『フェードル』の5年前、ラシーヌは『ミトリダート』で舞台上の毒の効果をすでに試していた。ポントスの王ミトリダートの2人の息子クシファレスとファルナスは父親の婚約者モニームを愛している。そしてモニームはクシファレスを愛している。彼らはミトリダートがローマ軍との戦いの中で死んだものと信じてしまったが、王は生きていた。生還したミトリダートは、モニームとクシファレスが愛し合っていることに気がつき、嫉妬に駆られ、この2人を殺し復讐しようとする。

2人の息子が父親の婚約者に恋をし、嫉妬深い父親が息子と自分の婚約者を殺そうとする。この悲劇の登場人物は『ロドギューヌ』の登場人物のことを思い起こさせずにはいられない。コルネーユが『ロドギューヌ』で示した「適切さ」を、ラシーヌも『ミトリダート』で保とうとするであろう。2人の息子が恋するロドギューヌがニカノールの妻ではなくなったように、『ミトリダート』で2人の息子が恋するモニームもミトリダートの妻ではなくなっている。この変更は重要である。この結果『ロドギューヌ』と『ミトリダート』に相似関係が生じることになるからである。また、後で見るように、モニームは裏返しのフェードルとでも呼ぶべき人物である。『ロドギューヌ』と『ミトリダート』に見られる相似関係は、そのまま『フェードル』の悲劇へも持ち越されるものとなることを私たちは後で確認することになる。モニームの変容を調べることは、フェードルの変容を、ひいてはラシーヌのフェードルを理解するのに重要な手がかりを与えてくれるのだ。では、ラシーヌは、モニームの死を史実からどのように変えたのだろうか。

ラシーヌは『ミトリダート』の序文でプルタルコスを引用し、モニームの出自を説明している。女王にするというミトリダートの約束を信じた彼女は、王の印たるヘアバンドを受け、彼と結婚したが、王はやがて彼女に死ぬように命令した。その伝えを聞いたモニームはヘアバンドを外し、首に巻きつけ、首を吊り死のうとした。しかしバンドは切れてしまった。ミトリダートの誓いのように当てにならず、死ぬことにも役に立たないヘアバンドに彼女は唾を吐くと、宦官に自らの首を切らせようと差し出した。このように、史実では、モニームは王の命令により死んでいる。それもこの悲劇の幕の開くずっと前に死んでいた。婚約者の息子クシファレスとの間にも恋愛関係は実際にはなかった。ラシーヌに先行するラ・カルプルネッドの『ミトリダートの死 *La Mort de Mitridate* (1637年)』にも、モニームとクシファレスは登場してい

ない。この2人が実在したとはいえ、父親の婚約者モニームに恋する息子クシファレスという設定は、ラシーヌの創作である。コルネーユが自ら作り出した挿話ゆえに『ロドギューヌ』に愛着を覚えていると告白したように、伝統や史実から物語が逸脱する部分にこそ、作者の個が凝縮されているはず。モニームとクシファレスの挿話は従って『ミトリダート』の中で最も注意深く読まなければいけないものである[12]。

モニームが、ラシーヌによって筋立てのなかに取り込まれたとき、彼女はプルタルコスが伝える女性とは異なっている。彼女は、王が命令したから死のうとするのではない。愛するクシファレスが死んだと思い込んだから、死を選ぶのだ。「クシファレスは死んでしまった」、彼女はそう言うと、愛する人に再び会うために、最も早く死者の国に降りていける道を求めた。彼女は愛のため死を選んだのだ。

> モニーム
> 死は絶望に1つ以上の道を開きます。
> そう、あなたたちが、私を不当に助けようとして
> 墓への最も早い道を閉ざしても無駄なこと。
> 私はあなたたちの腕の中にすら死を見つけるでしょう[13]。

このモニームの姿は、後に「より遅い道を通って死者の国へ降りていこう」としたフェードルの対極に位置するものである。むしろ彼女は私たちがすでに見てきた17世紀に入って変容したフェードル、テゼの婚約者であり、自らの愛がイポリットの死を招いたことを後悔しながらも、イポリットを追いかけて死んでいったフェードルに似ている。モニームも愛の殉教者の1人であったのだ。彼女は首を吊って死のうとしたが、王の印たるヘアバンドが切れてしまい、死ぬことができなかったことは史実のままである。この時、初めて王から死ぬようにという命令が届く。ミトリダートは彼女に毒を送り、自殺するよう強要するのだ。この毒が「王の意思を伝えるもの[14]」であった。彼女は、この王の意志を嫌がることなく受け入れる。死ぬことは彼女自身が望むことであったからだ。王から命令されたとはいえ、モニームが毒を飲むのは、強制されてのことではなく、自らの意志に基づいてのことであった。

---

[12] ラシーヌの『ミトリダート』を考えるとき、2人の兄弟の葛藤という点でコルネーユの『ニコメード *Nicomède*』も考慮に入れなければいけないだろうが、後者には「毒」というテーマが見られないのためここでは扱わないことにする。

[13] RACINE, *Mithridate*, in *O. C.*, acteV, scène i, v. 1500-1503.

[14] *Ibid.*, acte V, scène ii, v. 1518.

モニーム
ああ、なんと喜ばしいことでしょう。
それを私に。アルカスよ、私にそれを送ってくれた王にお伝えください、
王の好意が私に与えてくださった贈り物のなかで、
もっとも貴重で、もっとも望んでいたものを与えてくださったと。
ようやく、息をつけます。天は私を
生き続けさせようとする余計な手助けから解放してくれました。
天は一度だけ、私が私自身の主人として、
思いのままに自分の運命を決めることを許してくれたのです[15]。

「強制されることなく、心から喜んで自ら死んでいくというだけで十分である」とラシーヌがクレオパートルについて語っていたことを思い出そう。モニームも心から喜んで毒を飲もうとしたのだ。このモニームの誇り高さは、コルネーユの悲劇のヒロインに共通するものを持っている。ラシーヌはクレオパートルの死に見られたのと同じような偉大さをモニームの死に与えようとしているようだ。この偉大さは、生命を賭してもなすべきことがあると考える意志の強さから生まれたものに他ならない。『ロドギュース』では、クレオパートルは自らの命より、復讐を大切にした。モニームもまた命を賭してもするべきことがあったから、喜んで死んでいこうとしたのだ。さて、剣と飛び散る血が恋の情念の表象であったように、自死の道具は、その自死の理由と密接な関係を持たされていると考えられる。クレオパートルの毒は、自らが飲み、それを相手に飲ませることで復讐しようとした毒であった。それに対してラシーヌのフェードルが飲む毒は、イポリットの無実を証明し、後悔していると告げるために飲んだ毒であった。モニームの毒も、フェードルの毒と同じ役割のために飲まれるものである。毒は過ちを償うために使われている。毒を飲むとき、彼女は、死んだと思い込んでいるクシファレスに向かってこう言うのだ。

モニーム
嫉妬深い運命によって、あなたは
あなたを憧れるこの心と結ばれることはありませんでした、
英雄よ、私が生を終えるにあたって、
あなたと同じ墓のなかで結ばれたいと言うことも私はしません、
この贄を受け入れてください。そして今、

---

15 *Ibid.*, v. 1519-1526.

この毒が私の想い人の流した血を償ってくれますように[16]。

モニームはクシファレスの流した血を、与えられた毒をもって償おうとしたのだ。彼女は、2 人が愛し合っているということを、ミトリダートに告げてしまったため、クシファレスが死ぬ羽目になってしまったのだと信じていたのだ。2 人の愛という秘密は隠しとおすべきであった。彼女は、自分が恋人の命を奪ったのだと、自責の念に駆られている。確かに秘密の告白は、害をもたらす行為だ。しかし、『フェードル』におけるエノーヌの讒言という偽の告白ほど有害なものではない。エノーヌの讒言は、フェードルを守るという有益な目的のためとはいえ、結果的にはイポリットの死を招き、フェードルの死の原因ともなる有害なものである。モニームの告白はそうではない。クシファレスは死なないであろう。モニームもまた。

モニームとクレオパートルは、ある目的を遂行するために死すら恐れることはないという魂の偉大さを持っている点において似ているが、この 2 人には決定的に違う点がある。それは、クシファレスの死の償いをしようと言った彼女が実際に毒を飲むことはなかったのだ。モニームが毒を飲もうというその瞬間、過ちに気が付いた王が命令を取り消すために送った使者が登場し、彼女を止める。『ミトリダート』において、毒は威力を発揮することはない。実は、この悲劇は毒の無力さをめぐる物語でもあるのだ。そのことはミトリダートその人が十分に示していることではなかろうか。毒は彼に対して無力である。何故ならば、彼は毒に対する免疫を得ているのだ。

ミトリダート
なんということ、最も親しい人々の裏切りを恐れ、
ありとあらゆる毒に対し、私はわざわざ備えてきた。
ながく、苦しい努力の結果、私は、
最も恐ろしい毒の威力すら押さえ込むことができるようになった[17]。

この毒には強い彼にも弱点があった。それがモニームへの愛情という毒である。

ああ、危険な愛の矢を退けて、
老いて冷えてしまった心を
毒におかされた情熱で満たされないようにしたほうが、

[16] *Ibid.*, v. 1537-1542.
[17] *Ibid.*, acte IV, scène v 1417-1420.

賢く、幸せなことであったのではなかろうか[18]？

ヴェニュスの息子アムールが放つ矢には愛という名の毒が塗られている。勿論、それは常套句でしかない。それが単なる常套句でなくなるのは、この愛の毒が実際の毒との対比において使われ、やがては、その毒ゆえにミトリダートが実際の毒を飲まなければならなくなるようにラシーヌが作為したときである。この毒、モニームへの愛情という毒は、ミトリダートにとって実際の毒よりも危険なものだ。この愛情という毒のため、嫉妬に目がくらんだ彼は息子であるクシファレスを殺そうとした。そしてクシファレスが父の怒りを避け、宮殿から離れている時にローマ軍との戦いがあり、ミトリダートは敗北することになった。もし、ミトリダートが嫉妬に駆られず、クシファレスを手元においていたならば、彼は戦に勝ったかもしれないとラシーヌの戯曲は思わせる作りになっている(史実としては、クシファレスはこの戦には参加しておらず、なんの関係もない)。「愛情」と「毒」の関係がはっきりと、「毒でおかされた情熱」との詩句に打ち出されている。「愛情」は「毒」ともなる。このことは記憶しておかなければいけない。後で、フェードルの愛情が毒となり、テゼの宮殿を汚していくのを私たちは見ることになるのだ。ミトリダートに話を戻そう。愛の毒の結果、クシファレスを追放し、戦に破れたミトリダートは救いを毒に求める。彼はモニームに毒を飲むことを要求する。愛の毒を彼に盛ったモニームは毒で死ななければいけない。そして自らも毒を飲んだ。しかし、皮肉なことに、彼が望んだ効果を得るのに、毒は役に立ってはくれなかった。愛という毒のため、実際の毒を飲まなければいけない羽目におちいったミトリダートは、その毒では死ぬことはできない。裏切ることのないものだと信じていた致死性の毒も、免疫を持つ彼に威力を発揮することはないのだ。

アルバート
役に立たない助けだ、と王は言われました、*私は抵抗しすぎたのだ。*
全ての毒から身を守ろうとして、
私はそこから得られるはずの利益まで失ってしまった[19]。

この免疫のため、死ぬために、ミトリダートは剣でわが身を突き刺さなければいけなかった。さて、毒による救いが得られなくなった時、別の救いへ

---

[18] *Ibid.* v. 1421-1424. 傍点筆者。
[19] *Ibid.*, acte V, scène iv, v. 1578-1580.

の道がミトリダートに開けている。クシファレスとの和解である。もし王が毒によって死んでいたならば、彼はクシファレスと和解することはなかったであろう。この時、そもそもの原因となったモニームへの愛という毒も無力化されることになる。王はクシファレスとモニームの結婚を許し、死んでいく。彼は、実際の毒を克服したように、比喩としての毒をも克服したのだ。モニームへの愛情という毒に始まるこの悲劇は、この毒の克服で終わる。『ミトリダート』は毒の克服を主題とする悲劇と読むことができはしないか。それに反して、毒を克服することができないことの悲劇が『フェードル』となるであろう。そこで比喩としての毒と実際の毒の威力が存分に発揮されているのを私たちは見ることになる。

＊＊＊

ラシーヌはドービニャック神父の『演劇作法』を読み、それについて考察することで、舞台上での毒による自死の効果を理解していた。最大の効果を得るために、毒は瞬時に死なせるものであってはいけないと彼は考えたのだ。毒は、飲む者に、自らの意志を実行させるだけの時間を与えるものであるべきである。例えば『ロドギューヌ』のクレオパートルが復讐しようとした時のように。「心から喜んで」目的を達成しようと、死を選ぶとき、登場人物はある偉大さを獲得する。フェードルもまた、テゼの前に現れたとき、毒をすでに飲んでいた。彼女は、命を賭してもイポリットの無実を訴えようとしていた。彼女は剣よりも遅く死者の国へ降りる道を選択した。その死は重みのないものでは決してないだろう。

ラシーヌが『フェードル』の5年前に書いた『ミトリダート』におけるモニームの死は、ドービニャック神父の『ロドギューヌ』批判に対する一つの答えであった。モニームもクレオパートルと同じように、喜んで毒を飲む。彼女は、死んだと思い込んでいるクシファレスを追いかけていくことを欲していたのだ。その意味では、モニームはイポリットを追いかけて死者の国へ降りていく、セネカ以来の伝統の情熱的なフェードルに似ている。しかし、同時に、モニームが飲む毒は、彼女が犯したと考えている罪、クシファレスを殺す結果を生んだ秘密の暴露という罪、を償うものでもあった。ラシーヌのフェードルが後にするように、彼女は罪の償いをしようともしていたのだ。この意味において、モニームは17世紀のフェードルたちと、ラシーヌのフェードルの結節点であった。

モニームの飲む毒は、王によって命令された毒である。王はモニームへの

愛情という毒に犯されたゆえに、彼女に毒による死を宣告しなければいけなくなったのだ。『ミトリダート』は毒を中心に回っている。しかし、裏切りを恐れ、毒への免疫をつくっている王には毒は効かないため、この悲劇において、毒が効果を持つことはない。毒に救いを求めようとしても「死」という救いは得られないかった。だが、そのため彼は息子と和解することができ、モニームとクシファレスが結ばれることを許すことができた。彼は実際の毒と同時に、比喩としての毒をも克服したのだ。

2　メデとシルセ、太陽の娘たちと毒

ラシーヌの『フェードル』において、彼女が犯した罪を悔いながら死んでいく際に、魔女メデの毒が重要な役割を果たしているのを私たちはすでに知っている。この章ではラシーヌがフェードルの神話にもたらしたメデの毒という変更点がどのような効果を生み出しているかを、さらに詳しく調べることにしたい。そのために、まずこのメデの毒が17世紀フランスの舞台の上で、どのような意味を持ちえたかを、この毒の起源を参照しながら考えることにしよう。

魔女メデは、太陽の息子にしてコルキスの王アイエテスの娘である。母パシファエが太陽の娘であったフェードルとは、従って、血縁関係になる。このフェードルの叔母の生涯のさまざまな側面で毒が登場している。

ジャゾンが黄金羊毛を求めてコルキスにやってきたとき、メデは彼に恋をする。彼女は魔法の力でジャゾンの手助けをし、その後、彼と結ばれた。ピエール・コルネーユの『黄金羊毛 *La Toison d'Or* (1661年)』がこの時の話を舞台化している。しかし、この英雄は彼女を捨て、コリントスの王クレオンの娘クレウーズと再婚しようとした。嫉妬に狂ったメデは、復讐を考え、恋敵のクレウーズに毒を塗った服を贈った。その毒はクレウーズの身を焼きつくす。彼女は裏切り者を更に苦しめようと、自らの子供を殺し、宮殿に火を放つと、竜の背に乗り飛び去っていく。私たちがメデの名前を聞くとき、まず最初に思い出すのが、復讐のために自らの子供をすら犠牲にするこのメデの姿であろう。17世紀フランスではメデのこのエピソードをピエール・コルネーユが悲劇(1639年)に、マル=カントワーヌ・シャルパンチエとトマ・コルネーユがオペラ(1693年)に、ロンジュピエールが悲劇(1694年)にそれぞれしている。

さて、毒の表象を調べようとしている私たちが、この話でまず注目すべきことは、液体である毒が火を点けるということである。毒は恋敵の身を文字通り焼き尽くす。

哀れな王女様がその服を身に着けるやいなや、
彼女は死なんばかりに激しい熱を感じました。
火が突然燃え上がり、その火の粉はいく筋にも分かれ
あなた様の死を招く贈り物の上を走りました、
クレオーヌ様と王様はその火を消そうと、身を投げ出されました、
しかし、またしても嘆き悲しまなければいけないことでしょう、
この火は王様を捉え、王子様も同時に
同じ炎のうちに包まれてしまわれたのです[20]。

このことを覚えておく必要がある。後で見るように、メデの姪、フェードルもまた、その身を焼き尽くす毒に苦しむことになるからだ。不義、近親相姦の恋という毒に、彼女は燃えることになるであろう。だが、毒は火を点けるだけではない。『フェードル』において、フェードルに火を点けるのが毒ならば、その火を消すのも毒である。フェードルは自らの不義の恋の炎を消し、罪を清算するために、メデの毒を飲むだろう。その毒は彼女の燃え上がる血管を通り、「死につつある心臓に、かつて知ったことのない冷たさを投げかける」ことであろう。火を点けることが可能な液体としての毒は、液体ゆえに火を消すこともできるという二重性を持っているのだ。

火を点ける毒、そしてその火を消すこともできる毒。毒は常に相反する側面をもっている。もともと毒は、ギリシア語ではPharmakon(毒・薬)であったように、薬と表裏一体のものであった[21]。フュルチエールの辞書による毒の定義にある「毒は食物の反対のものである。何故ならば食物は生命を保つのに役に立つが、毒は生命を破壊するものだからである」は、薬の定義にある「薬は食物の反対のものである。何故ならば食物は肉体と変化するが、毒は肉体を悪いほうへ変化させるからである」という定義と対をなしている。毒と薬は同じものでしかない。「あるものにとっての薬は、他のものには毒となることがある」のだ。

毒が薬にもなるように、メデもまた二重性を持った人物である。彼女は、

[20] Pierre CORNEILLE, *Médée*, in *O. C.*, t. I, acteV, scène i, v.1325-1332.
[21] Pharmakon に関しては、Jean STAROBINSKI, *Le Remède dans le mal*, « NRF Essais », Gallimard, 1989, Jacques DERRIDA, *La dissémination*, « Tel Quel », Seuil, 1972 を参照。

太陽の娘として光り輝く人物であると同時に、嫉妬ゆえに恋敵を殺し、自分の子供たちまで殺すことのできる血にまみれた人物でもある。彼女の使う毒・薬はまさに彼女の二重性を象徴している。毒も薬も同じものの裏表でしかない。使い方によってのみ、毒となるか薬となるかは決まる。メデの術も益になることもあれば、害になることもあった。彼女の術はかつて黄金羊毛を守っていた竜を眠らせ、ジャゾンを手助けした[22]。彼女のおかげでジャゾンは栄光を獲得することができた。実際、彼女以外にジャゾンを助けることができるものはいなかった。「もしあなたが彼女の心を掴んでいないのならば、何もあなたの役に立つものはないでしょう。もし、彼女の心を掴んでいるのならば、何もあなたを害するものはないでしょう[23]」との言葉は偽りではなかった。ジャゾンが黄金羊毛を手に入れた後、メデは彼と結ばれた。この時の彼女には明るさがある。ピエール・コルネーユの『黄金羊毛』がルイ14 世の「結婚を祝う」ために上演されたのも、この明るさゆえのことであろう。

だが、ジャゾンが彼女を捨てたとき、メデは死を招く人物になる。彼女の術は恋敵を毒殺した。そして彼女は我が子すら夫に復讐するためには殺すことのできる人物ともなるのであった。

ジャゾンと別れたあとのメデに起きたことを、リュリーとキノーのオペラ[24]『テゼ *Thésée* (1675 年)』が教えてくれる。ここにメデとフェードルの接点があるのだ。キノーはオウィディウスの『変身物語』第 7 巻の逸話から着想を得ていたようだが、『変身物語』は、トマ・コルネーユによる翻訳がでるなど、17 世紀フランスではよく読まれていた[25]。それによると、我が子を殺

[22] Cf. Apollonios de Rhodes, *Argonautique*, Chant IV. ピエール・コルネーユの『黄金羊毛』では、メデは自ら竜の背に乗り、黄金羊毛を取ってきている。
[23] CORNEILLE, Pierre, *La Toison d'Or*, in *O. C.*, t. III, acte I, scène vi, v. 629-630.
[24] オペラと悲劇は基本的にジャンルが異なるものであるが、この小論の目的は『フェードル』における毒がどのような役割を果たしたのかを調べることにある。そのために直接ラシーヌがどのような効果を生み出そうと試みたのかを調べるのと同時に、17 世紀フランスの観客が「メデの毒」という言葉が舞台上で発せられるのを聞いたとき、どのようなことを連想しえたであろうかということを調べることは、重要である。従って、当時の観客が持ちえた教養全て(その中には当然オペラも含まれる)をコーパスにするべきだと考える。また 1672 年リュリーが王立音楽アカデミーの特権認可状を得てから、オペラは人気を呼んでいた。『フェードル』はオペラに対する、悲劇からの 1 つの答えであったとデルマスは指摘している(DELMAS, Christian, *La Mythologie dans* Phèdre, in *Mythologie et Mythe dans le théâtre français*, Genève, Droz, 1985, p. 244.)。このため、この悲劇を考える際に、音楽悲劇(オペラ)のことを考慮しないわけにはいかない。
[25] レイモン(Raimond)、シャルル・ド・マサック(Charles de Massac)、ルヌアール(N.

したメデはアテネの王、エジェ(アイゲウス)のもとへと逃げて来ていた。子供が授からずデルポイの神託に伺いをたてたが、その意味が分からず苦労していたエジェをメデは助けてくれたので、メデを庇護するという約束をこのアテネの王はしていたのだ。アテネでメデはエジェと結ばれる。そこへエジェの息子テゼがアテネに到着した。エジェはテゼが自分の息子であることを知らない。かつてトレゼーヌの王ピッテウスの娘アイトラと契り、子をもうけたが、その子が生まれる前にアテネに戻らなければいけなかったため、彼は自分の息子の顔を知らなかったのだ。テゼも、まず実力で王の息子に相応しいと示すことを欲したため、親子の名乗りをまだしていない。そのことに気が付いたメデは、テゼが王位を簒奪しようとしているとエジェに讒言し、父親に息子を毒殺させようと企んだ。

テゼは毒の盛られた杯を飲もうと片手に取り、もう片方の手で剣を引き抜き、王に忠誠を誓おうとする。そのとき、王はテゼの剣を見て驚く。アイトラと別れる時、生まれてくる子が男子であれば、アテネの王位継承者にしようと思い、いつの日か彼がアテネに来たとき我が子だと分かるように剣を渡していたが、テゼの持っている剣がまさにその剣だと王は気が付いたのだ。彼はテゼがまさに飲まんとしていた杯を払い落とす。自分の企みが失敗したことを理解したメデは逃げ出す。正当なる後継者であると認められたテゼは、アテネの王となる[26]。

『テゼ』と『フェードル』の対比は極めて目立つものである。『テゼ』の物語で、エジェは息子のテゼを彼に与えた剣のおかげで救うことができた。エジェはその剣をテゼが持っていることで、彼が自分の息子だと気がつき、知らないうちに自分の息子に毒を飲ませて殺してしまうという惨劇を逃れることができたのだ。それに対して、テゼは自分の息子のイポリットを、剣のために失うことになる。テゼはその剣が息子の近親相姦の罪の言い訳のできぬ証拠と信じた。フェードルが愛を打ち明け、拒絶されたとき、自らの行為を恥じ、イポリットの剣を奪い死のうとした。フェードルの手に残されたその剣をフェードルの乳母エノーヌが讒言に利用し、息子がその剣で夫婦の褥を犯そうとしたとテゼに信じこませたのだ。さて、この剣は、父テゼが息子であるイポリットに与えたものである。

Renouard)、ピエール・デュ・リエ(Pierre du Ryer)、トマ・コルネーユ(Thomas Corneille)、バンスラード(Issac de Benserade)などがこの物語の翻訳をだしていた。

[26] キノーの『テゼ』と同じ主題で1644年にラ・セール(LA SERRE)が、1700年にラ・フォッス(LA FOSSE)が悲劇『テゼ』を書いている。

テゼ
彼が狂った情熱の道具にした、その剣には確かに見覚えがある、
もっと気高いことに使うようにと彼に与えた剣だ[27]。

セネカ以来、この剣は「細やかな浮き彫りの施された、高貴な象牙の輝くこの柄、まさしくアテナエのわが一族に伝わる家宝[28]」といわれるものであった。この剣がテゼの父親がテゼに与えたものと同じものと考えるのことはそれほど無理なことではない。いずれにしても、ラシーヌの悲劇の観客にとってイポリットの剣は、大当たりした音楽悲劇『テゼ』の剣、テゼが命拾いをすることになる剣をすぐに思い起こさせるものであったはず。剣は矛盾する 2 つの役割を果たす。Pharmakon が毒にも薬にもなるのと同じように、同じ剣が生かしもするし、殺しもする。1 人の息子は救われ、もう 1 人は命を失う。

この神話にキノーはある変更を加えており、その変更の結果『テゼ』は注目に値する作品となっている。『フェードル』との間にある相似関係が生まれるのだ。キノーはメデに義理の息子を愛させたのである。メデとフェードルは、おたがいに義理の息子を愛するという共通項で結ばれることになる。これはキノーの独創であった。セネカの悲劇でイポリットがフェードルとメデを比較していたが、それによると悪女メデも近親相姦の罪は犯していなかった。すでに見てきたように[29]、イポリットはフランスの舞台に立つようになってから、恋をするように変わっていったが、神話のイポリットは、すべての女性を嫌悪し、呪い、避ける男性であった。彼にとって、メデ 1 人で女性が諸悪の最たるものであることを十分立証するものであった。

ほかの女のことは言うまい。アエゲウスの妻となった
あのメデア 1 人で十分であろう、女が呪われた族であることの、証には[30]。

しかし、義理の母親であるフェードルが彼のことを愛していると知ったとき、彼は父テゼのことを羨む。何故ならば、テゼの義理の母親であるメデは、テゼを毒殺しようとしただけだが、フェードルは近親相姦の罪へと彼を誘うからだ。フェードルは「コルキス出のあなたの継母メデアよりも、もっとひ

---

27 RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, acte IV, scène i, v. 1009-1010.
28 セネカ、大西英文訳、『パエドラ』、『悲劇集 1』、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、1997 年、p. 393。
29 拙論『『フェードル』における死の表象の変遷』。
30 セネカ、『パエドラ』、p. 366、563-564 行。

どい継母、もっとひどい女[31]」であった。従ってメデも近親相姦の罪だけは犯していなかったと考えられる。キノーは、このメデに、義理の息子に相当するテゼを愛させた。17世紀のフェードルたちが「適切さ」から、テゼの婚約者になったのと同じように、アテネに来たメデは王と結婚の約束を交わしているだけであるが、メデ、フェードルの類似は明らかである。キノーのメデは義理の息子に恋をすることで、神話のフェードルに近づいている。メデとフェードルは姻戚であるというだけでなく、行動もまるで双子のようである。魔女メデは若き王子に恋をする。しかし、父親の婚約者である彼女の想いをテゼは受け入れることはない。イポリットがアリシーを愛しているように、テゼはエグレ姫を愛している。そして不幸なことに、たとえメデが天地を動かす力を持っていようと、その力は愛されるための力とはならない。

> 私が望めば、地獄も武器を取る。
> だが、人を恋の炎で燃えさせることはできない、
> 私の最も強い魔法も彼を強制することはできない。
> ああ、私を恐れさせるための魔法なら十分すぎるほどあるのに、
> 私を愛させるための魔法などほとんどないのだ[32]。

愛させる術を知らないメデは、愛を受け入れないテゼに復讐しようと、テゼが王の地位を狙っていると偽りの告発をする。メデの姪のフェードルも、テゼの息子イポリットに恋をする。イポリットもフェードルの想いを拒む。神話のフェードルも報われぬ恋を復讐しようと、イポリットを讒言していた[33]。2人の息子の運命は異なった結末を迎えたが、原因は同じ、義理の母親が息子に抱く不義の愛情であった。彼女たちはその愛が受け入れられないと逆恨みし、嫉妬に狂い、義理の息子を讒言する。フェードルとメデは、確かに同じ血筋の生まれである。

さて、メデは更にテゼへの復讐を進める。彼女はテゼの父親のエジェに自分の息子を毒殺させようとするのである。このことも重要である。太陽の娘たちは魔法としてのPharmakonの術を知っている。そして、彼女たちはかなわぬ恋にPharmakonを使い対処しようとする。しかし、この媚薬であり、毒でもあり、薬でもあるPharmakonによって彼女たちは決して癒されることは

---

[31] 同上、p. 378、697行。
[32] QUINAULT, *Thésée*, Acte II, scène I, Christophe Ballard, 1677, p. 21.
[33] ラシーヌのフェードルは復讐のため讒言するのではない。讒言は乳母エノーヌの役割であった。エノーヌは彼女を助けるため、イポリットを讒言したのだ。

ない。愛の前では、彼女たちの術の力は無力なものとなる。メデの魔法は彼女を愛させることができない。そして、彼女の毒も、受け入れられない愛の復讐の役には立ちはしない。

リュリーとキノーによるオペラによって、私たちはフェードルがどこから毒を入手したのかを知ることができる。「メデがアテネにもたらした毒」とは、メデがテゼに飲ませようとした毒であったのだ。ラシーヌの『フェードル』の中でメデの名がでるのは、フェードルが死ぬときに「メデがアテネにもたらした毒」を飲んだと告げる場面だけである。しかし、オペラ『テゼ』の成功をまだ記憶に留めている観客にとって、メデとフェードルの関係は明らかなものであったであろう。テゼ、イポリットは親子2代にわたり、太陽の娘である義理の母親の不義の愛という毒に苦しむ運命にあった。

オウィディウスによると、メデがテゼに飲ませようとした毒は黒海の岸辺から持ってきたトリカブトの毒であったようだ。トリカブトはアコニチン(アルカロイド)を含み、嘔吐、下痢、呼吸困難、手足のしびれ、呼吸麻痺などの激しい中毒症状を引き起こす毒草であるが、この毒草は地獄の犬ケルベロスをエルキュール(ヘラクレス)が地上に引きずりだした時、ケルベロスの口から出たものだという。

> 抵抗にもかかわらず、エルキュールはケルベロスに日の光を見させた。
> この怪物は、後ろを振向き、
> 恐ろしい太陽の光を避けようとしたが無駄だった。
> 強い光に恐怖を感じ
> 怪物は飛び跳ね、激昂し吠えた。
> そして、怪物の3つの口から、大量に
> 百の毒の死を招く種が流れ出るのであった[34]。

フェードルが最初にラシーヌの悲劇に登場した場面のことを思い出しておこう。彼女は日の光を見ることを望みながら、その目は日の光にくらみ、すぐにまた隠れることを欲する。彼女は自ら求めた日の光を憎んでいるかのようであった[35]。後に詳しく見るように、日の光を恐れるフェードルもまた近親相姦、不義の恋、そして讒言という「毒」を撒き散らすであろう。

太陽の娘であるメデは、恋に破れたとき、毒に頼る。彼女は夫ジャゾンを

---

[34] Thomas CORNEILLE, *Metamorphoses d'Ovide*, T. II, Liege, Broncart, 1698, p. 116-117.
[35] RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, acte I, scène iii, v. 165-168.

奪ったクレウーズに毒を塗った服を贈った。その毒はクレウーズを焼き尽くす。そして、彼女はまた義理の息子テゼに恋をしたが、受け入れられず、彼を毒殺させようとした。ここで、もう1人の太陽の娘の神話を取り上げておきたい。彼女もまた、愛する人の心を得ることができないと悟ったとき、恋敵を毒殺しようとした。シルセ(キルケ)である。

シルセと、メデの父アイエテス、フェードルの母パジファエは、太陽神ヘリオスと大洋の女神ペルセイスから生まれた。シルセ、メデ、フェードルは全員、太陽神の血を受け継いでいるのだ。シルセも姪のメデと同じ名高い魔女であった。黄金羊毛を守るため、アイエテスは「姉妹のシルセ、娘のメデという博識の2人の魔女の魔法によって、獲得を不可能なものにしようとした[36]」ほどであった。彼女が住んでいたアイアイエ島では、彼女を怒らせたものは動物に変えられた。オデュッセウスの一行を豚に変えたのも彼女である。ここで取り上げる挿話では、彼女は恋敵を毒で怪物に変えてしまう。1670年代には、立て続けに太陽の娘たちを主人公にした悲劇が登場しているが、この恋に苦しむシルセを描いているトマ・コルネーユとドノー・ド・ヴィゼの「音楽つきの機械仕掛けの悲劇」『シルセ *Circé* (1675)』も、その1つであった。音楽は20年後に同じトマ・コルネーユの『メデ』のために作曲することになるシャルパンチエである。この機械仕掛けの悲劇は成功を収めたようだ。「今まで、この悲劇の重要な装飾である機械ほど、美しく、驚くものを人は見たことがなかったから[37]」と、トマ・コルネーユは成功の原因を分析している。当時のオペラと機械仕掛けの悲劇では、「真実らしさ」を重要にした悲劇と異なり、神々が空を飛び、悪魔が出てきて魔女を手助けするなどのスペクタクルが許容されていた。例えば、キノーの『テゼ』でもメデは舞台上に悪魔を呼び出し、毒を作っていた[38]。メデ、シルセの神話は悲劇より、オペラもしくは機械仕掛けの悲劇に相応しいものであったようだが、おなじ太陽神の娘であるフェードルの神話もオペラにするのが難しいということでもなかった。実際、1733年にペルグランとラモーがフェードルの神話をオペラ『イポリットとアリシー*Hippolyte et Aricie*』に作り変えたとき、ペルグランは「オペラの舞台を飾るのに、これほど相応しい題材はないように思えた[39]」と言っている。キノーの『テゼ』でも、フェードルとメデの神話の類似

---

[36] Pierre CORNEILLE, Examen de *La Toison d'Or*, p. 208.
[37] Thomas CORNEILLE, Argument de *Circé*, p. 176.
[38] 詳細は拙論「『王女メデ』：17世紀オペラと悲劇における「異教的驚異」の表象」、『仏語仏文学研究』第20号、東京大学仏語仏文学研究会、p. 3-19を参照。
[39] Simon Joseph PELLEGRIN, *Hippolyte et Aricie*, V. Delormel & Fils, 1757, p. iii.

を考慮すれば、フェードルの神話をオペラ化したものと考えることすらできるだろう。オペラと悲劇は、神々、魔法などの異教的驚異を描き出すやり方において異なっていたことを考えれば、魔法を使う太陽の娘たちの神話は、確かにオペラに相応しい神話であったのかもしれない。しかし、そうであればあるだけ、悲劇ではどのようにこの神話が扱われたかが重要な問題となるだろう。悲劇では、魔法などの異教的驚異は直接舞台上に乗せることはできない。言葉によって、異教的驚異を描き出すしかなかったのだ。例えば、オペラでは「毒」は悪魔たちが実際に舞台に出てきて調合することができる。しかし悲劇においては、「毒」を調合しようとする時でも、悪魔たちは言葉によって舞台上に呼び出されるだけだ。逆に言えば、悲劇は言葉によって異教的驚異を呼び出すことができるものであるということである。「毒」という言葉が発せられた時、その言葉は単なる物質としての毒を指し示しているのではない。それは後ろに控えているさまざまな神話を参照することを要求し、なにかを呼び出している。それが一体、何を呼び出しているのかを見極めることがこの小論の主題なのである。

さて、『シルセ』であるが、再び題材をオウィディウスの『変身物語』巻14にとっている。海の神グラウコス[40]はニンフのシラ(スキュラ)に恋をしたが、彼女の心を得ることができず、シルセの助けを求めた。ところが、魔女シルセはグラウコスを愛してしまう。彼女は彼に愛されようと、魔法を使うが、メデの魔法と同じように、彼女の魔法は恋には役に立たない。嫉妬するシルセは、復讐しようとシラが水浴びする泉に毒を仕掛ける。

> 泉の水が盛り上がり、逃げようとする
> シラの上に落ちてきて、包み込んでしまいました、
> その水は彼女を見るもおぞましい姿に変えてしまったのです[41]。

毒により怪物に変えられてしまったニンフは海に飛び込み、姿を消してしまう。シルセもまた恋敵を殺すのに躊躇しない情熱に突き動かされる女性であった。

このシルセもメデと同じく両義的性格を所有する人物であった。確かに、

[40] グラウコスは太陽の娘たちの神話と奇妙に関係が深い。シラとシルセの物語の前に、彼はすでにバッカスと結ばれていたフェードルの姉妹アリアーヌに恋をしている。また、彼はアルゴノートの冒険の手助けもしていたのである。

[41] Thomas CORNEILLE, *Circé*, acte V, scène v, *Œuvres*, Genève, Slatkine Reprints, 1970, p. 655.

彼女はグラウコスの愛を得られなかったとき、恋敵を殺す。しかし、彼女は他人の罪を清めることができる人物でもあったのだ。メデがジャゾンと逃亡する際、父アイエーテスの追っ手を足止めようと、彼女は自分の弟アプシュルトスを八つ裂きにしていたが、その罪を清めたのがメデの叔母シルセであった[42]。Pharmakon の術を知る太陽の娘たちは恋敵を毒を使い、殺そうとする暗い側面と、役にたつ明るい側面を持っている。それは Pharamakon の毒と薬の二面性に相当するものである。おなじ太陽の孫娘であるフェードルにもこの両義性は受け継がれているに違いない。次の章以降では、そのことを調べることにしよう。『フェードル』において、彼女が飲んだ毒以外にも毒があふれていることにも注意しなければいけない。「なんと不吉な毒を、愛は王の館に降り注いだのだろう[43]」とイポリットが言っているように、『フェードル』では、彼女の不義の愛そのものが毒であるのだ。

3　エノーヌの役割

メデとフェードルの間には近親関係以上に相似関係が存在する。だが、フェードルはメデのように義理の息子を殺そうとしたのではない。確かに、イポリットも太陽の孫娘である義理の母親フェードルの愛情を拒んだため、死なねばならなかった。しかし直接にこのフェードルの不義の愛という毒がイポリットを殺したのではない。彼は父テゼの呪いにより現れた怪物が原因で死ぬのだ。そして、この父親の呪いを引き出したのが、イポリットが父の褥を力ずくで汚そうとしたという偽りの報告である。この讒言もまた『フェードル』において毒の役割を果たしているのである。不義の愛という毒について調べる前に、この毒について調べることにしよう。まずラシーヌの悲劇で讒言という行為を任されているフェードルの乳母がどのような役割を果たしているかを考えることにしたい。ラシーヌは讒言について「この卑劣な行為は、乳母にこそ相応しいもののように思えた。乳母はより卑しい傾向の持ち主であろうからだ。[44]」と語っている。

では、エノーヌとは誰であろうか。彼女はフェードルの分身であり、フェードルの心の奥に隠されている暗い欲望を体現する人物である[45]。この乳母

---

[42] APOLLONIOS de Rhodes, *Argonautiques*, Chant IV.
[43] RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, acte III, scène vi, v. 991-992.
[44] Jean RACINE, Préface de *Phèdre et Hippolyte*, p. 817.
[45] Charles MAURON, *L'inconscient dans l'œuvre et la vie de Racine*, Champion-Slatkine, 1986, éd., 1957, p. 158.

は愛をイポリットに打ち明けるようにと助言した。そして、その愛の告白が効果を生まず、さらにテゼの帰還によりフェードルの愛そのものが不可能なものになったのを見るや、イポリットを讒言するように助言する。エノーヌが助言することは、フェードルが望んだことである。フェードルは分身の助言にすがりつく。しかし、この助言を受け入れても、どこにも行き着かない。もともとが不可能な愛にはどんな助言も有効ではなく、ただ無垢のイポリットの命を奪うだけであった。自分の欲望の望みが全て消え去ったと気づいたとき、フェードルは自分の分身を見捨て、彼女が毒を盛ったと非難している。エノーヌの口から出てきた助言は役に立たないどころか、害にしかならなかったと彼女は言う。

フェードル
何を言うのか？何という助言をおまえは与えようというのだ。
そのようにおまえは私に最後まで毒を盛ろうというのか、
そのようにおまえは私を破滅させたのだ[46]。

エノーヌはフェードルの乳母であることによって、「母」でない「母」、フェードルの義理の母親と呼んでよい存在である。「娘」がイポリットへの不義の愛という毒に苦しむ時、この「娘」の欲望を担う「母」も毒をばら撒くのだ。キノーの『テゼ』と異なり、『フェードル』ではイポリットの義理の母親が讒言という毒を使うのではない。イポリットの義理の母親の、そのまた義理の母親が毒を使うことになるのだ。毒を使うものが、1 代ずれることにより、フェードルの罪は弱められたものになる。ラシーヌはフェードルを「まったくの無実でもなく、まったくの有罪でもない」人物として描き出そうとしていたことを思い起こそう。エノーヌは緩衝装置として存在している。全ての罪は乳母エノーヌになすりつけられる。「天が私の胸に、死を招く炎を植え付けました。後は唾棄すべきエノーヌが全てやったこと[47]」とフェードルはエノーヌに罪をきせるのだ。

しかし、イポリットの命を奪うことになる讒言について、「彼女はこの嘘の告発を、フェードルの命と名誉を救うためだけにしたのだ[48]」ともラシーヌは言っている。このことは重要である。命を奪う讒言はもともとは役に立つことを目的としていたのだ。エノーヌの助言する偽りの告発は毒にも薬に

[46] RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, acte IV, scène vi, v. 1307-1309. 傍点筆者。
[47] *Ibid.*, acte V, scène vii, v. 1625-1626.
[48] Préface, p.817-818.

もなる Pharmakon であった。先ほどのフェードルがエノーヌを責めた台詞も、なんとかして「娘」の死を思いとどまらせようとして、エノーヌが言った言葉「別の見方で見れば、この罪も許されるものです。あなたは愛しているのです、運命に打ち勝つことはできません[49]」という「薬」に答えたものであった。エノーヌは、フェードルの命を守ることしか考えていない。彼女がフェードルに与える助言はすべて彼女を救おうという意図を持つ「薬」であったのだ。だが、その「薬」は役に立たず、「毒」となり、エノーヌは、フェードルに見捨てられる。そのとき、彼女には生きていく理由が見つけられなくなる。彼女には道は1つしか残されていない。深い海に飛び込み死を選ぶしか[50]。

エノーヌの薬が決して有効なものとならないこと、有益たることを望みながら毒にしかならないことを、順を追って確かめることにしよう。最初にフェードルの命を脅かしていた毒は、彼女がイポリットに抱く不義、近親相姦の愛であった。そのために彼女は死を望んでいた。しかし、毒がイポリットへの愛情ならば、薬となるのもイポリットである。最初は絶望していたエノーヌは、テゼの死の知らせを聞くと、まずフェードルにイポリットへの恋の炎を正当化してみせることから始める。

> 生きてください、もはや非難すべきことはありません、
> あなたの恋の炎も、普通の恋の炎になりました。
> テゼ様は亡くなられると同時に、あなたの恋の炎を恐ろしい罪にしていた
> 結婚の絆を解消してくださいました。
> イポリット様もあなたにとって、前ほど恐るべき方ではなくなりました。
> 罪を犯すことなく、彼にお会いになることもできるのです[51]。

イポリットに愛を打ち明けるように、エノーヌは助言するのである。愛の毒に苦しむフェードルを助けるためには、この毒を体の外にだすしかないとエノーヌは知っていたのだ。だが、この助言・薬は効き目がなかった。イポリットがフェードルの愛を受け入れなかったからだ。「人が決して聞いてはならないことを私は言ってしまった[52]」ため、名誉を失ったと考える彼女は、エノーヌが彼女に与えた助言を問題にする。

---

49 *Ibid.*, acte IV, scène vi, v. 1296-1297.
50 *Ibid.*, acteV, scène v, v. 1465-1468.
51 *Ibid.*, acte I, scène v, v. 349-354.
52 *Ibid.*, acte III, scène i, v. 742.

フェードル
おまえは衰えつつある私の力を呼び起こし、
口から逃げ去ろうとしている私の魂を
おべっか使いの助言でもって、生き返らせたのだ[53]。

何故生き返らせた、「何故、私の死のうという意図を邪魔した[54]」とフェードルはエノーヌを詰問する。それに対して、エノーヌは弁明する。「娘」の命を救うためなら、彼女はどんなことでもするであろうと。

エノーヌ
ああ、無垢であろうと、罪深かろうと、不幸から
あなたを救うためだったら、私がしなかったことなどあるでしょうか[55]。

フェードルにはこの弁明を受け入れるしかない。一度、エノーヌの薬を受け入れてしまったフェードルは、「おまえの言うことすべてを認めよう、私はおまえに期待するしかない[56]」と、エノーヌ以外に頼るものはなにもないのだから。フェードルは、今度は自分からエノーヌに薬を要求する。エノーヌ自身は先ほどの会見でイポリットが決してフェードルを愛することはないであろうということに気が付いている。彼女は、フェードルに彼を諦めるように説得しようとしているし、「フェードル様が今、私と同じように見ることができますならば[57]」と嘆きもする。しかし、彼女を救うためならどんなことでもエノーヌはするということを知っているフェードルは、エノーヌがイポリットへの愛の橋渡しをすることを望み、それ以外は「もはやその時ではなくなっている[58]」と強要するのだ。イポリットのことを忘れられないフェードルには、イポリットの愛情以外に彼女を癒すものはない。フェードルはエノーヌにもう一度、彼に話をして欲しいと頼む。フェードルはイポリットが森のなかで育ったため、愛を知らないから自分の愛を拒絶したと考えようとしたのだ。愛を知れば、きっと自分のことを愛してくれるだろうと彼女は期待した。勿論、彼女は思い違いをしている。イポリットは愛を知っていた。彼はアリシーを愛しているのだ。後でそのことを知り、フェードルは衝撃を受けることになるだろう。

---

[53] *Ibid.*, v. 769-771.
[54] *Ibid.*, v. 747.
[55] *Ibid.*, v. 773-774.
[56] *Ibid.*. v. 811-812.
[57] *Ibid.*, v. 780.
[58] *Ibid.*, v. 765.

フェードルの願いは聞き入れられることはない。エノーヌがイポリットに話をする必要もなかった。死んだと思っていたテゼが帰ってきたため、イポリットへの愛そのものが、再び禁止されたものに戻ってしまったのだ。しかも、エノーヌの先程の薬によって、状況は前よりも悪くなっている。今やイポリットはフェードルの不義・近親相姦の愛を知っている。フェードルは「王の名誉を傷つける愛を、恥ずべきことに告白してしまった[59]」ため、夫である国王テゼがイポリットから話を聞いて、彼女の罪を知るのは時間の問題であると信じこんでしまった。この点でも、彼女は思い違いをしている。後で見るように、フェードルが不義の愛の告白、讒言と口を開くことによって不幸を招くのならば、イポリットはその秘密を話さないことによって不幸になる人物であるからだ。しかし、もしイポリットが話さないとしても、この壁が、この天井が声を出し訴えるであろうと信じる彼女は死ぬしかないと思い込む。それも幕が開いたときとは異なり、名誉を失って。それも全てはエノーヌが原因だ。

フェードル
今朝、私が死んでも、人は悲しんでくれた。
私はおまえの忠告に従った、そして名誉を失い死ぬのだ[60]。

このように非難されても、フェードルから罪を負わされることなどエノーヌにとってなんでもないことだ。それよりも、フェードルがまた死を望んでいるということが彼女には問題であった。どうして彼女の「娘」が死ななければいけない。彼女が死ぬ必要があろうか。そうだ、イポリットに罪をなすりつけてしまえばいい、エノーヌはそう考える。

エノーヌ
こちらから彼を訴えましょう、
彼があなたに着せることのできる罪を彼に着せましょう[61]。

フェードルのイポリットへの愛情という毒が、彼女の命を奪おうとしたとき、エノーヌはイポリットへ愛を告白することを薬としてフェードルに助言した。愛という毒は、愛という解毒剤しか持たない。しかし、その薬は毒となり、今やフェードルは不義・近親相姦の愛情が国王に暴露されることを怖

[59] *Ibid.*, acte III, scène iii, v. 833.
[60] *Ibid.*, v. 837-838.
[61] *Ibid.*, v. 886-887.

れ死のうとしている。秘密の暴露が毒となるのであれば、薬・解毒剤となるのも、秘密の暴露である。エノーヌはイポリットがフェードルに対して近親相姦の愛情を抱いているという(虚偽の)秘密を暴露することで、「娘」の命を救おうとする。エノーヌにしても、無垢のものを讒言しようというのだから良心の呵責を感じていないわけではない。「私も心が痛みます[62]」と彼女は言う。しかし、それよりもフェードルの命のほうが大切だ。エノーヌが施そうとした讒言という薬以外に、「娘」の命を救うすべはない。

エノーヌ
しかし、この惨めな薬なくしては、あなたを失うことになる以上、
あなたの命は、私にとって、何物にも勝る価値を持つのです[63]。

エノーヌのこの薬に、フェードルは再び頼るしかない。

フェードル
おまえのしたいようにするがよい、おまえに任せる。
混乱の中にいる私には、なにもできない[64]。

不幸なことに、エノーヌが薬だと思ったものはまたもや効果がない。効果がないどころか、それは毒となり害を与えていく。薬は毒となり、また薬を必要とするという連鎖反応を生成し、『フェードル』の物語の原動力となっていくのだ。そして、この連鎖反応の原因は、もともとフェードルの抱いている愛情(毒)は癒すことが不可能なものであることにある。この悲劇で薬は決して役に立つことがない。薬は毒になるしかないのだ。フェードルはそのことを最初から承知していた。彼女は最初にイポリットと会って以来、恋の毒に苦しんでいた。そのときの「私は見ることも、話すこともできなくなった、体が凍え、そして燃え上がるのを私は感じた[65]」という彼女の症状は、毒に犯されたものでしかないだろう。後述するように、彼女の愛は、愛の女神ヴェニュスが太陽の一族にかけた呪いが原因である。フェードルはこの女神を祭り、捧げ物をし、呪いから逃れようとした。しかし、それも無駄なこと。女神の呪いは太陽神の一族が生きている限り続く。この愛という毒は致死性のものであり、解毒剤は存在しない。「癒すことのできない愛の、無力

[62] *Ibid.*, v. 895.
[63] *Ibid.*, v. 897-898.
[64] *Ibid.*, v. 911-912.
[65] *Ibid.*, acte I, scène iii, v. 275-276.

な薬よ[66]」と、彼女は薬の無力さを嘆いていた。実際、一度は不公平な継母が前の妻の息子を嫌っているように見せかけて、イポリットを遠ざけたが、その用心も無駄になっていた。残酷な運命は、夫テゼ自身が彼女をイポリットの住むトレゼーヌへ連れてくることを欲したのだ。アムールの弓矢による傷は、イポリットの姿を再び見るや、開いてしまう。

> 剥き出されたままの傷口からは、すぐに血が出はじめた。
> もう私の血管の中に隠れた恋の情念ではない、
> ヴェニュスが全力で餌食に取り掛かっているのだ[67]。

ここでもう1つ注目しておかなければいけないことは、傷から入った恋の情念という毒は最初、彼女の血管の中に隠れていたということである。フェードルは自らの命を絶つとき、「メデがアテネにもたらした毒を、飲み、自らの燃えるような血管に流し込んで[68]」いた。毒は彼女の血管を通り、心臓を止めることによって、罪を清め、太陽の光に明るさを取り戻させるだろう。毒は毒によってしか、癒されることはない。

さて、致死性の毒に犯されたものは治ることがないと知っていながらも癒されようと、藁にもすがろうとする。『フェードル』の悲劇は、そこから始まったとも言える。フェードルは乳母の助言(愛をイポリットに告白すること、イポリットを讒言すること)にすがりつこうとする。しかし、乳母の助言は、一時的に偽りの希望でフェードルの命を保つことに成功するだけだ。癒されることは決してない。そして、希望を心に抱いてしまえば、その希望が打ち砕かれたときの絶望は大きい。その希望の偽りに気づかざるをえなくなったとき、彼女を癒そうと解毒剤を処方したエノーヌは、フェードルにとって唾棄すべき存在となった。だからこそエノーヌは毒を盛ったと非難されることになったのだ。『フェードル』は、愛という毒が薬を必要とし、それがまた毒となる連鎖反応の物語と読むことができるのである。その連鎖反応の中心にエノーヌがいる。この悲劇はエノーヌがいなければ、始まらないものであるのだ。このエノーヌの存在価値はその助言に集約される。従って、エノーヌの助言(毒・薬)をフェードルが聞くことを拒否し、「私はもうおまえの言うことを聞かない[69]」と宣言したとき、エノーヌは「彼女の役に立とうとあら

---

[66] *Ibid.*, v. 283.
[67] *Ibid.*, v. 304-306.
[68] *Ibid.*, acte V, scène vii, v. 1637-1638.
[69] *Ibid.*, acte IV, scène vi, v. 1317.

ゆることをして、何もかも捨てたというのに、このような報酬しか得られないのか[70]」と嘆き、死を選ぶしかなかった。そして彼女は海に飛びこみ、死んだのだ。

エノーヌはその助言ゆえにフェードルに「怪物[71]」とまで呼ばれた。彼女が飛び込んだ海からは、やがて本当の怪物が生まれ、イポリットを殺すことになるだろう。この怪物こそエノーヌの讒言という毒が産みだしたものだ。フェードルの母パジファエが産んだ怪物ミノタウロスをイポリットの父テゼが倒したのに対し、フェードルの「母」エノーヌが産んだ怪物はテゼの息子イポリットを倒すことになるのだ。

ここまで、エノーヌの使う薬が毒にもなるし、薬にもなる両義性を持つものであることを見てきたが、実はエノーヌ自身も両義性を持つ人物であった。このことを理解するためには、もう 1 人のエノーヌの話をしなければいけないだろう。17 世紀の観客はエノーヌという名前を聞いたとき、このもう 1 人のエノーヌのことを思い起こしたはずなのである。17 世紀に広く読まれていたオウィディウスの『有名女性たちの手紙 *Héroïdes*』に河の神の娘エノーヌからパリスへの手紙が含まれているが[72]、このエノーヌがここで問題の人物である。1670 年にトマ・コルネーユが出版したフランス語韻文による『オウィディウス選集 *Pièces choisies d'Ovide*』にも、エノーヌからパリスへの手紙を含まれていた[73]。勿論、ここで、ラシーヌが乳母の名前を何処から得たのかということを問題にするつもりはない。そうではなく、エノーヌの名前が当時の観客にどのような効果を無意識のうちに及ぼしえたかという可能性を問題にしたいのだ。フェードルの乳母には、神話の河の神の娘と類似するところがあるであろうかということが焦点となる。

トロイア王プリアモスとヘカベの息子パリスは、生まれてくる子が破滅をもたらすという予言のためイデ山に捨てられ、羊飼いたちによって育てられた。3 人の女神のうち誰が最も美しいかという争いをパリスが裁定したのもイデ山においてのことであった。彼はヴェニュスに黄金の林檎を勝利の証と

---

[70] *Ibid.*, v. 1327-1328.
[71] *Ibid.*, v. 1317.
[72] ジャン・ポミエはラシーヌがこの手紙からエノーヌの名前を取ったのではないかと示唆している。Jean POMMIER, « L'histoire littéraire d'un couple tragique », in *Aspects de Racine*, Nizet, 1954, p. 339.
[73] Thomas CORNEILLE, *Pièces choisies d'Ovide*, Claude Barbin, 1670, pp. 111-138. この翻訳には、本来含まれていたフェードルからイポリットへの手紙は含まれていない。

して与えていた。パリスは、その後、王の子と認められ、受け入れられることになったが、王の代理としてスパルタに送られた時に、メネラオス王の妻エレーヌ(ヘレネ)に恋をし、彼女をさらっていってしまった。その為ギリシアとトロイアの間に戦争が勃発したことを知らないものはいない。この王子はイデ山に追放されている間に、ケブレン河神の娘、エノーヌと恋に陥り結婚していた。しかし、ヘレネに目を奪われたパリスは、彼女のことを思い出すこともなくなっていく。オウィディウスの作品のエノーヌがパリスに宛てた手紙とは、パリスの不実を訴えるものであるのだ。

このエノーヌであるが、注目すべきところはパリスとの挿話ではない。かつてアポロンが彼女に恋をしていたことがあったということに注目しなければいけない。

> ネプチューヌとトロイアの壁を作るようにラオメドンに使われた時、アポロンは河の神の娘エノーヌの美しさに魅了され、彼女を犯した。この不正に対する恨みを和らげようと、アポロンは彼女に薬学を教え、どんな病気でも治せる術を与えた[74]。

従って、もう1人のエノーヌは癒す術を心得ていたことになる。彼女はアポロン[75]から教えられ、草木の根を治療に使うためのありとあらゆる知識を身に付けていた。しかし、彼女の術は万能ではない。パリスに捨てられたとき、彼女の術は何の役にも立たなかったのだ。

> しかし、この光に富む知識も
> 私が感じている動揺を和らげることはできないのです。
> 私の術によって誰もを救うことができるのに、
> 私は私自身を救う術を持ってないのです[76]。

恐るべき魔女である太陽の娘たちも薬の術を知っていた。そして、彼女たちの術をもってしても、愛する男たちの心を引きとめておくことができなかったことを思い出そう。メデはジャゾンに捨てられ、テゼに拒絶される。シルセは、ユリシーズとグラウコスに拒絶されていた。彼女たちの媚薬

---

[74] *Ibid.*, p. 137.
[75] アポロンもフェードルの神話と関係がないわけではない。彼の息子アスクレピオスが、父から医術の神としての役割を引き継いだが、神話によると、彼は死せるイポリットを生き返らせたため、雷に撃たれて死んでいるのだ。
[76] *Ibid.*, p. 132.

(Pharmakon)は役に立たない。それだけではなく、彼女たちの薬は、失恋の苦しみを取り除くこともできなかった。彼女たちにできるのは、恋敵を殺すため毒を使うことだけだ。だが、そうしたところで苦しみが癒えることはない。エノーヌの薬の術も、パリスを引き止めることもできない。そして、失恋の苦しみを癒すこともできなかった。エノーヌと太陽の娘たちは、薬の術を知っていても、恋の病を癒すことができなかったという点で、結ばれている。

3 世紀頃に活躍したギリシアの詩人スミュルナのクイントゥスが『ホメーロス後日譚』の第 10 巻で、パリスとエノーヌのその後を描いている[77]。この本は 16 世紀終わりに人口に膾炙しているものであった。トロイア戦争の最中に、ピロクテテスの放った毒矢がトロイアの王子を傷つけた。彼を救うことができるのは、エノーヌただ 1 人である。パリスはかつての恋人のもとへ向かい、治療してくれるよう頼んだ。しかし、彼をまだ愛しているエノーヌは、エレーヌを愛し続けるパリスを嫉妬心から許すことができない。彼女は治療を断った。愛する男が恋敵と結ばれるのを見るくらいならば、愛する男を殺すことを選んだのだ。このように、有益ともなるし、害になることもあるという両義性の持ち主である点でも、彼女はメデ、シルセたちと似ている。だが、パリスの死は彼女を絶望させる。彼女は燃える薪の山の中、パリスの亡骸の隣へと身を投げ出し死んでいく。彼女は死せる恋人を追いかけて死者の国に降りていこうとする情熱的な女性であった。

メデ、シルセの魔女たちの場合と同じく、愛が問題になるとき、エノーヌの薬(Pharmakon)の術は無力である。また、メデ、シルセ、フェードルが太陽の娘たちであるならば、エノーヌはアポロンに恋された娘である。この神は、ポイボス(「輝ける」)・アポロンとも呼ばれるため、5 世紀ごろから太陽神と混同されるようになっていた。例えばドノー・ド・ヴィゼの機械仕掛けの悲劇『太陽神の愛 *Les Amours du Soleil* (1671)』において太陽神の名前はアポロンになっている。古典の教養を持っているラシーヌが、アポロンと太陽神を混同したとは考えられないが、太陽王ルイ 14 世の治世下の観客は、太陽神がアポロンと呼ばれることに違和感を覚えなかったようだ。太陽神の孫娘フェードルの命を救うために薬を処方するが、結局彼女の命を奪うことになってしまうエノーヌの姿は、アポロンの恋人であったエノーヌ、薬の術を会得していながら、恋の病を癒すことができなかったエノーヌを思い起こさせるものであっただろう。フェードルの乳母エノーヌは、彼女の使う薬だけではなく、

---

[77] クイントゥス、『トロイア戦記』、松田治訳、講談社学術文庫、講談社、2000 年、p. 308-334。

本人も毒にも薬にもなりうる人物を連想させる名前の持ち主であったのだ。

4　フェードルの死

4.1.　毒・薬の連鎖反応

毒と薬は、Pharmakon の両面であり、使い方によってのみ、どちらになるかが決定される。エノーヌがフェードルに与えた薬が、毒となり、連鎖反応を引き起こすこと、この悲劇の中心に毒・薬の連鎖反応があり、エノーヌがその反応の中心にいることは見てきたが、この乳母が最初に治療しようとした毒、フェードルがイポリットに抱いた愛情という毒はどこから来たのだろうか。この章以降でそのことを問題にしたい。

ラシーヌの悲劇をよく読んでみると、実はこの悲劇は毒の言説に満たされていることに気が付く。もともとフェードルが不義・近親相姦の愛という毒に苦しんでいたからこそエノーヌの薬が登場したことを思い出そう。近親相姦の愛が毒となり、フェードルの命を奪おうとする。それに対してエノーヌが薬を処方しようとする。その時、この悲劇の幕が開いたのだ。エノーヌの毒・薬の前にフェードルの愛という毒が存在する。継母の愛の告白を聞いてしまったイポリットも、トレゼーヌで愛の毒が猛威を振るっているのに気が付いた1人であった。「なんと恐ろしい毒を、愛は父さんの屋敷に降り注いだのだ[78]」と、彼は嘆いている。エノーヌの讒言を信じた父に国を追放された時も、彼は愛するアリシーにトレゼーヌを去り、彼とともに来るように頼みこむ。トレゼーヌはもはやフェードルの不義・近親相姦の愛によって汚染されていたからだ。

> 不吉で、汚れた土地から逃げるのです。
> ここでは徳ですら毒で汚された空気を吸っている[79]。

この愛・毒の二重性は、フェードルとイポリットの神話を扱った他の作品群では、16 世紀の詩人ガルニエの悲劇『イポリット』を除いて登場しない。この悲劇で、イポリットは「快楽、我らの時代の毒[80]」を避けようとしてい

---

[78] RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, acte III, scène vi, 991-992.

[79] *Ibid.*, acte V, scène i, v. 1359-1360. 傍点筆者。

[80] Robert GARNIER, *Hippolyte*, in Œuvres complètes, éd. Raymond LEBÈGUE, « Les Textes Français », Les Belles Lettres, 1974, acte III, v. 1290.

たが、フェードルの心に潜む「毒を避ける[81]」ことはできなかった。まだエノーヌという名前を与えられていない乳母がこの毒の危険性を要約する。

乳母
まったくのところ、恋は蛇なのです、
静かに私たちの胸の中に入ってくるので、
気が付くことは少ないのです。でも進入を許さないように
気をつけていなければ、そして、わずかでも遅れてしまうと、
すぐに回復の望みを絶たれて、
その毒に血液を侵されてしまうのです。
そのときになって、狡猾な獣の侵入を許したことの
過ちに気が付くのです。それでは遅すぎますが[82]。

ラシーヌ悲劇のヒロインもこの毒の危険性を知っていた。彼女は自らの恋の狂乱が毒となっていることを知っている。イポリットに恋を打ち明けるとき、彼女はこう弁明しなければいけなかったのだ。

私は愛している。しかし、そなたを愛しているとき、
自分自身を罪のないものと思い、認めているなどと思わないで欲しい、
卑劣にも自分にだけは寛容に、
私の理性を乱す恋の狂乱の毒を養ったとは考えないで欲しい[83]。

そうではない。彼女が悪いのではない。神々が「彼女の胸の内に、血縁のもの全てに死を招いた炎をつけた[84]」のだ。彼女が苦しむ毒の由来については後で見ることにするが、ここでは彼女自身が、彼女の不義・近親相姦の愛情を毒と思っていたことに注意しておこう。そう考える彼女が、毒・薬であるエノーヌの助言を聞き、イポリットに愛という毒を打ち明ける。彼女の口から出たこの比喩としての毒は、実際の毒となり出発点に戻ってくるだろう。テゼの館に毒を振りまいたものは、毒をもって自らの命を絶つことになるのだ。

毒・薬の連鎖反応としてこの悲劇を考えた場合、まず最初にフェードルがイポリットに抱く愛の毒がある。そのために彼女は死にかけていた。乳母エノーヌが彼女を救おうと解毒剤を処方する。イポリットに愛を告白し、彼の

---

81 *Ibid.*, acte V, v. 2198.
82 *Ibid.*, acte II, v. 477-484.
83 RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, acte II, scène v, v. 673-676.
84 *Ibid.*, v. 679.

心を手に入れるように助言したのだ。しかし、この助言は毒となったため、状況は悪化する。イポリットは愛を受け入れることはないし、なにより死んだと思われていたテゼが帰還してしまったのだ。そのため名誉を失ったと思うフェードルは死を望む。エノーヌは新たな薬を彼女に与える。イポリットに罪をなすりつけることで、フェードルの名誉を保とうとしたのだ。この讒言が、国王であるテゼをして息子を殺させることになる毒であった。毒の効果を打ち消そうという薬そのものが、毒となり、新たな薬を必要とする。そして、その薬もまた毒となる。この連鎖反応は、患者が完全に治癒するか、死ぬまで続く。フェードルにとっては、それは死であった。自らの恋のため起きたことを知ったとき、フェードルは自分の毒が引き起こした罪を償うため、自らも毒を飲む。この毒こそが、最初の毒の効果を打ち消し、日の光の純粋さを取り戻させるという点で、最後の解毒剤となるのであった。毒は口から出て、口へと戻っていく。フェードルの毒による自死は、この悲劇の最初から入念に用意されたものであるのだ。

4.2. ヴェニュスの呪い

エノーヌを触媒とする毒・薬の連鎖反応が『フェードル』の物語を進行させるプロセスであることが分かった。では誰がこの毒･薬という連鎖反応を引き起こしたのだろうか。「おお、ヴェニュスの憎悪よ、おお、死をよぶ怒りよ[85]」とフェードルはすぐにそれがヴェニュスの呪いによるものであることに気が付いていた。

> 私はヴェニュスと彼女の恐るべき炎に気がついた、
> 彼女が責めたてる血族の逃れられない苦しみに[86]。

フェードルがイポリットに抱く恋の炎は、太陽へのヴェヌスの復讐が原因であったのだ。フェードルの不義･近親相姦の愛の炎は、ヴェニュスによって彼女の体に植え付けられたものだ。

ところで、ヴェニュスが復讐するときに使うものは、彼女の息子のアムールの毒を塗った弓矢である[87]。ヴェニュスの矢は全て自分に命中したとフェ

[85] *Ibid.*, acte I, scène iii, v. 249.
[86] *Ibid.*, v. 277-278.
[87] おなじくヴェニュスの復讐を扱った作品にモリエールとコルネーユによる『プシシェ *Pshyché* (1671)』がある。そのなかでヴェニュスはアムールに「おまえの矢のうち、もっとも私の気に入るものを持っていきなさい。おまえが怒りのうちに放つ矢のなかでも最も毒を塗ったものを(プロローグ)」と告げていた。

ードルも言っていた[88]。イポリットと再会したとき、また血が噴き出した彼女の傷口[89]というのは、まさにこの弓矢の傷口に他ならない。そこから毒はフェードルの体に侵入し、血管の中を駆け回った。そしてこの毒が彼女の胸に炎を点けたのだ。このような神の復讐の前では、人は無力である。フェードルも死を決意するしかない。

> ヴェニュスが望む以上、この忌まわしい血族の
> 最後の 1 人、最も惨めなものとして私は死ぬ[90]。

この炎のため死にそうな彼女を救おうと、乳母が薬を処方したのであって、毒・薬の連鎖反応の出発点には、愛の毒により点けられた炎が存在していたのだ。もっともエノーヌにしてもフェードルの炎を容認していたのではない。この炎は太陽の孫娘に相応しいものではないと考える彼女は「消さなければいけなかった炎を抱きつづけている[91]」と「娘」を非難していた。だが、愛という毒により点けられた炎は、「メデがアテネにもたらした毒」によって消しさられるときまで、日の光の純粋さを汚しつづけているであろう。嫉妬に駆られるメデの毒は恋敵クレウーズの体を文字通りに焼き尽くすことができたように、毒は火をつけることができることができる。フェードルはこの愛の毒によりつけられた炎に悩まされつづけるであろう。

ヴェニュスの復讐の原因の詳細については後で見ることにするが、まず『フェードル』では日の光と恋の炎の対比が際立っていることを確認しておこう。そのこともヴェニュスの復讐に関係があるのだ。フェードルは太陽神の一族の 1 人であるのに、ヴェニュスにより点けられた恋の炎のため、日の光を避けなければいけなかった。

> フェードル
> 私は死ぬことで名誉を守り、
> 日の光から、これほどまでに暗い炎を隠そうと欲したのだ[92]。

フェードルの胸の内に、ヴェニュスの復讐による恋の炎が燃え盛り、日の光を避けなければいけなくなっている一方、フェードルが愛するイポリット

---

88 RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, acte III, scène ii, v. 816.
89 *Ibid.*, acte I, scène iii, v. 304.
90 *Ibid.*, v. 257-258.
91 *Ibid.*, acte III, scène i, v. 754.
92 *Ibid.*, acte I, scène iii, v. 309-310.

の心は日の光より清い。讒言を信じ、彼を弾劾するテゼに、イポリットはこう弁明している。

> **イポリット**
> 日の光すら、僕の心の奥底より純粋なものではありません。
> それなのに、イポリットが汚らわしい恋の炎に夢中だというのですか[93]。

『フェードル』には2つの愛が登場する。イポリットがアリシーに抱く愛情と、フェードルがイポリットに抱く愛情である。だがこの2つは性質が異なるものだ。フェードルも、そのことを承知している。イポリットの側に太陽はついていると彼女は知っていた。彼女は自分の祖父である太陽の光を避けなければいけないというのに、日の光はイポリットとアリシーの愛を認めているのだ。

> 天は彼らの無垢な恋のため息を認めている。
> 彼らは後悔することなく愛にふけっていた。
> 彼らには毎日、澄んだ明るい日の光が登っていた。
> 惨めにも全世界に見捨てられた私が、
> 日の光を避け、光から逃れようとしていたというのに[94]。

フェードルの愛の炎は、ヴェニュスの太陽の一族への復讐によるものであるにも関わらず、日の光は、不義・近親相姦の愛という暗い炎を認めない。それどころか、日の光は彼女の恋敵とイポリットの愛を承認するかのようである。日の光と炎の光の対比により、フェードルの孤独は大きなものとなっていく。

さて、フェードルの愛の炎は恐ろしい毒をテゼの屋敷に降り注ぎ、トレゼーヌの空気をも毒で汚し、エノーヌの助言という毒･薬の連鎖反応を引き起こす。彼女の愛は毒という言葉に集約されるようだ。それに対し、イポリットとアリシーの愛は日の光に例えられると同時に、魅力(charme)という言葉に要約される。アリシーに恋を打ち明けるときのイポリットの台詞「僕を惑わすその魅力に打ち勝つことができただろうか[95]」は、彼女の魅力の牽引力を物語っている。本来、イポリットはアリシーを避けなければいけなかった。彼女は王の敵の一族の娘であり、「婚姻の松明が彼女のために点されること

[93] *Ibid.*, acte IV, scène ii, v. 1112-1113.
[94] *Ibid.*, acte IV, scène vi, v. 1238-1242.
[95] *Ibid.*, acte II, scène ii, v. 523.

は決してない[96]」のだ。だが、婚姻の火が点されない時、逆にアリシーの魅力はイポリットには天により強調されるものと変わっている。「日の光、夜の闇、全ては避けなければいけない魅力を僕の目に描いてみせる[97]」とイポリットは言う。

しかし、結局のところこのフェードルがイポリットに感じる愛情と、イポリットとアリシーが感じている愛情の2つは同じ所に源を有する。

もともと魅力(charme)とはフュルチエールの辞書によると「それによって、魔法使いたちがデーモンの力を借りて、自然の秩序に逆らうか、自然の力以上の驚異的なことを行うことのできる魔法の力」と定義されている。それが「比喩的に、私たちに大変に気に入るもの、賞賛の念で心を奪うもの」となるのであって、魅力とはまず魔法のことをさす[98]。そして魅力・魔法はすぐに愛の媚薬という Pharmakon の1つの側面に結びつくものである。その魅力・魔法・媚薬の反対に位置するのが、Pharmakon としての毒であることは言うまでもない。魅力・魔法と毒も同じものの両面だと考えることが可能なのだ。最初にフェードルの命が絶えようとしている時、エノーヌが「いかなる魔法(charme)が、いかなる毒があなたの命の泉の源を枯らしたのですか[99]」とフェードルに尋ねたことを思い出そう。エノーヌは、魔法と毒が同じものであることを知っていたのだ。従って、フェードルの愛という毒がヴェニュスの復讐によるものならば、アリシーの魅力もまたヴェニュスの復讐によるものでなければならない。イポリットの養育係テラメーヌは、自尊心から今までヴェニュスを軽蔑していたイポリットが恋していると気が付いた時、この女神が「他の人間と同じように、彼女の祭壇に香を捧げさせるようになったのか[100]」と問い掛けていた。この台詞は単に比喩としてイポリットが愛を知ったという意味に終わるものではないのだ。女神の太陽の一族への復讐は、魅力(charme)という魔法をイポリットとアリシーに、毒(poison)をフェードルに注ぎかけるものであったということを意味していたのだ。イポリットが「父親の宿敵の娘にして姉妹であるアリシーに対して、我知らず情念[101]」を抱くこともヴェニュスが仕組んだこと、彼女の復讐の一部である。そのことによっ

[96] *Ibid.*, acte I, scène i, v. 110.
[97] *Ibid.*, acte II, scène ii, v. 544-545.
[98] フェードルがイポリットとアリシーの愛を知ったとき、「彼らはどのような魔法(charme)を使って、私の目をだましていたのだ(*Ibid.*, acte IV, scène vi, v. 1231)」と問い掛けている。
[99] *Ibid.*, acte I, scène iii, v. 190.
[100] *Ibid.*, acte I, scène i, v. 63-64.
[101] *Ibid.*, Préface, p. 818.

て、フェードルの愛はますます不可能なものとなる。太陽の一族の最後の 1 人である彼女の絶望をさらに大きなものにすることを女神は望んだのだ。

それほどに愛の女神ヴェニュスは容赦がない。女神はフェードルがすでに敗北を認めている時、さらに追い討ちをかける。フェードルは責め苦を逃れようと、イポリットこそ愛の神を避けているのだから、彼女ではなく、彼をこそ征服すべきだとヴェニュスに訴えていた。

> おお、私が陥った恥辱を見ている
> 情けをかけぬヴェニュスよ、私は十分辱められたか。
> おまえはこれ以上残酷なことはできまい。
> おまえの勝利は完全だ、おまえの矢は全て命中した。
> 無慈悲なるものよ、もし新たな栄光が欲しいのならば、
> おまえに歯向かう敵を襲うがよい。
> イポリットはおまえの怒りをものともせず、おまえから逃げている。
> 彼は一度もおまえの神殿に跪いたことがない。
> おまえの名前は彼の高慢な耳を傷つけるものらしい。
> 女神よ、復讐するのだ。私たちの利害は同じものだ。
> 彼が愛するということだ[102]。

勿論、イポリットは愛に無関心な男ではない。魅力という魔法に捕らわれた彼はアリシーを愛していたのだから。フェードルがそのことを知ったのは、エノーヌの讒言により、宮廷を追放されたイポリットのことを父王に取り成そうとした時のことであった。イポリットは、自分に罪があるとするならば、義理の母フェードルではなく、宿敵の娘にして姉妹のアリシーを愛していることだとテゼに弁明していた。そこへ後悔の念に苦しめられていたフェードルが、引きとめようとするエノーヌの腕を振り切って、息子を救おうと飛んでくる。自らの罪を悔いるフェードルは、イポリットとアリシーが愛しあっていると知るまで、無実のイポリットを救うためならどんなことでもしようと思っていた。「私は自分を告発することすらしたであろう。話を遮られなければ、恐ろしい真実が私の口から洩れさえしたであろう[103]」とすら彼女は言っている。だが、イポリットとアリシーの愛を知らされた彼女は嫉妬に狂い、真実をテゼに告げなかった。その恐ろしい真実を彼女が口にしたのは、イポリットの命が失われてからでしかない。讒言の毒を中和するためには、真実を口にするしかない。丁度、フェードルが愛という毒で死にかかってい

---

[102] *Ibid.*, acte III, scène ii, v. 813-823. 傍点筆者。
[103] *Ibid.*, acte IV, scène v, v. 1200-1202.

たとき、告白することで、その毒を体の外に出すようにエノーヌが忠告したように。それができなければ、毒は体から出ることなく、命を奪うことになるであろう。

フェードルはイポリットが愛することを知らないと考えていた。そう思えばこそ、彼女は自らの恋の炎を悔いて、一度は抑えようとすることができた。誰も手に入れることのできないものならば諦めもつく。しかし、イポリットが愛することを知っているのなら、彼女を愛することだってできるはずではないか。「消しきれなかった炎が胸の内に燃え上がる[104]」のを彼女は感じる。押さえつけられていた炎が解放されたとき、その炎は前よりも激しく燃え上がる。

勿論、このように考える彼女の論理は破綻している。イポリットが愛することを知っているからといって、彼が彼女を愛さなければいけないことにはならないのだ。アリシーを愛する彼がフェードルを愛することは決してない。それどころか、イポリットが耐えられないただ1人の人間が彼女なのだ。心の底ではそのことを自覚しているために、彼女の苦しみはさらに大きなものになる。イポリットへの愛情の不可能性に苦しむだけでなく、彼女はアリシーへの嫉妬にも苦しまなければいけなくなったのだ。彼女は「アリシーを滅ぼさなければいけない[105]」と叫ぶ。この時のフェードルは、彼女がメデと血縁であることを思い出させてくれるものではないだろうか。「私は何をしているのだ？私の理性はどこへ迷っていこうというのだ[106]？」と自分に問いかける彼女はもはや自分の感情を制御することができていない。

「夫が生きているというのに、自分の(イポリットへの)愛がまだ燃え続けている[107]」のに気が付いたフェードルは絶望する。罪に気がついていながら、その罪から逃れることができない時、人は絶望する。しかも嫉妬に駆られるフェードルは、太陽の光の前で恥ずべきことに、無垢のものを滅ぼすことをすら燃えるように願うまでになっている。彼女はいまや不義・近親相姦の愛の炎だけでなく、復讐の炎にも燃え上がっているのだ。

> 私の罪はもはや度を越えてしまった。
> 私は同時に近親相姦と中傷を求めている。
> 私の人殺しの手は、復讐しようと、

---

104 *Ibid.*, v. 1194.
105 *Ibid.*, acte IV, scène vi, v. 1259.
106 *Ibid.*, v. 1264.
107 *Ibid.*, acte IV, scène vi, v. 1266.

無垢の血に漬かることを、燃えるように願っている[108]。

ヴェニュスの放った毒矢は、フェードルの胸の内に愛の炎を点けた。その炎は、復讐の炎ともなり、いまやイポリットの命をも欲している。イポリットとアリシーの恋がヴェニュスのかけた魅力という魔法によるものである以上、その恋に対してフェードルが感じる嫉妬、復讐心もまたヴェニュスの呪いの一部ということになる。女神はフェードルに復讐の苦しさをも身をもって感じさせることを望んだのだ。フェードルはこの罪の重さに打ちのめされた。この愛の炎を、この嫉妬の炎を日の光の下から隠さなくてはいけない。「罪深いものよ、私はまだ生きているのか？私はまだ祖先の神聖なる太陽を見ることができるのか[109]。」だが、どこへ行けばよい。死者の国の闇の中には、彼女の父ミノスが死後、裁判官としておもむいている。そこで彼は娘の罪を裁くのを待っているのだ。このようにヴェニュスの呪いはフェードルを滅ぼしていく。彼女は息を引き取るまで不運に見舞われ続け、苦しみのうちにその生を終えなければいけないであろう。

「娘」を救おうとするエノーヌの助言が引き起こした毒･薬の連鎖反応の輪から抜け出すために、フェードルは最終的に毒を使い自らの命を絶つ。この悪循環から抜け出すきっかけとなったのは、フェードルが自分に与えるエノーヌの助言の両義性に気がついたことにある。エノーヌの助言する愛の告白も讒言も効果を発揮せず、しかも自分には恋敵すらいることを知り、フェードルは愛と復讐の二重の炎に燃える。その罪深さを怖れるあまり死のうとする彼女に、エノーヌは最後の薬を与えようとした。

不当な恐れを退けてください。
別の見方で見れば、この過ちも許されるもの。
あなたは愛しているのです。誰も運命に打ち勝つことはできません。
宿命の魅力にあなたは引きずられたのです[110]。

この助言が問題となった。死すべき運命にある人間である以上、運命には逆らえないではないか。宿命の魅力(charme)には勝つことはできない。神々ですら愛を避けることはできないとエノーヌは主張している。しかし、魅力とは太陽の光に照らされるもの。フェードルが苦しまなければいけない、ヴ

---

108 *Ibid.*, v. 1268-1272.
109 *Ibid.*, v. 1273-1274.
110 *Ibid.*, v. 1295-1298.

ェニュスの毒矢により燃え上がった不義・近親相姦の毒・愛の炎、復讐の炎とは相容れないものである。魅力という日の光に、この愛の炎の原因を求めようとするエノーヌの欺瞞はどうしようもなく明らかなものであった。「最後までおまえは私に毒を盛ろうというのか[111]」と、フェードルはついに自分が薬と頼ってきたエノーヌの助言が毒であったことを認めざるをえなかった。彼女にはもはや頼るものがなにひとつとしてない。メデの毒を除いては。

4.3. 口から放出される毒、視線の矢

ヴェニュスの太陽の一族への復讐は、フェードルだけに襲い掛かるのではない。この復讐はフェードルの母パジファエにも姉妹のアリアーヌにも襲い掛かっていた。パジファエは愛の狂乱のうちに、クレタの聖牛と交わり怪物ミノタウロスを生んだ。クレタの王ミノスはアテネに毎年7人の若者と娘を送ることを課して、その若者たちを怪物の餌食にした。アテネの後継者となったテゼが、クレタ島に来て、アリアーヌの力を借りて怪物を倒す。アリアーヌはテゼを愛したのだ。結婚の約束をした彼らは、ともに島を抜け出すが、テゼはアリアーヌの姉妹のフェードルを愛するようになり、アリアーヌを捨ててしまう。アリアーヌは失意のうちに死んだと伝えられている[112]。太陽の娘たちはヴェニュスの復讐を逃れることができないのだ。彼女たちは愛により苦しむ。しかし、何故、女神は太陽の一族の娘に復讐しようとしているのだろう？『フェードル』において、ヴェニュスの復讐による毒・薬の連鎖反応

---

[111] *Ibid.*, v. 1308.

[112] 17世紀フランスでこの主題を扱ったものには、アレクサンドル・アルディ(Alexandre HARDY)の『奪われたアリアドネ *Ariadne ravie* (1624年)』、テオフィル・ド・ヴィヨー(Théophile de VIAU の『パジファエ *Pasiphaé* (1627年)』、そしてトマ・コルネーユの『アリアーヌ *Ariane* (1672年)』がある。なかでもトマ・コルネーユの『アリアーヌ』は成功を収めた。5年後にフェードルを演じたラ・シャンメレー嬢が、このときアリアーヌを演じている。

アリアーヌはテゼに捨てられた後、バッカスと結ばれたという神話もあり、こちらはドノー・ド・ヴィゼが『バッカスの結婚 *Mariage de Bachus* (1672年)』という機械仕掛けの悲劇にしている。

テゼであるが、ラシーヌの悲劇に彼が登場するのは『フェードル』が初めてのことではない。『イフィジェニー』において、彼はエリフィルの父親として名前だけであるが登場する。彼はイポリットが指摘したように、恋多き人物である。それは演劇においても同様で、ラ・セール『テゼ』ではイポリットの母親アンチオープ、キノー『テゼ』ではパノペウスの娘エグレ、ピエール・コルネーユ『エディップ *Œdipe* (1659年)』ではエディップの姉妹ディルセ、ラシーヌ『イフィジェニー』ではトロイ戦争の原因となったエレーヌ、そして、ミノスとパジファエの娘たちアリアーヌとフェードルと結ばれている。

が存在することが明らかになったが、この悲劇のなかでは、誰もヴェニュスの復讐の理由について説明していない。

実は、女神は自分が味わったのと同じ苦痛を太陽の一族に与えることを望んでいたのである。フェードルの味わう苦痛はヴェニュスが味わったものと同じであるのだ。そのことを理解するために、まずは、この女神の復讐の犠牲になったもう1人の太陽の娘シルセが、悲劇『シルセ』の中でこの原因を説明しているのを聞くことにしよう。

> シルセ
> 疑うことはできない。情け容赦のないヴェニュスが
> いまだに受けた侮辱を根に持っているのだ。
> 彼女とマルスの恋の炎を神々に知らせたのが
> 太陽神であった。彼の証言だけが知らせたのだ。
> 女神が私の胸におく残酷な愛は
> 受けた侮辱を私に復讐しようというものなのだ[113]。

ヴェニュスは、軍神マルスとの不義の愛を太陽神に密告されたのを恨んでいる。女神は太陽神の口から出た言葉によって、傷ついた。彼女の怒りの原因は太陽神の口にあったのだ。

ところで、フェードルは「メデがアテネにもたらした毒」を「燃える血管のなかに流し込んだ」時、どのように毒を摂取したのだろうか。彼女は特にその点について言及していないが、メデの毒が他の場合にはどのように使われたかを調べることによって、明らかにすることができる。メデは、まず恋敵のクレウーズを殺したとき、彼女に贈ったドレスに毒を染み込ませていた。従って、クレウーズに復讐したときに使った毒は皮膚から吸収されるものであったことになる。しかし、義理の息子であるテゼを殺そうとしたとき、彼女は「用意周到に毒を盛った杯[114]」を使用していた。フェードルはこの杯を見つけて、自死に用いたはずなので、問題の毒は口から摂取されるものだと推定される。彼女を死に至らしめた毒は、口から入ったのだ。この口は、先程見たようにフェードルが不義・近親相姦の愛という毒を告白した口である。愛の毒は口から放出されるものであった。丁度、メデの毒が、日の光に当てられたときに地獄の犬の口から吐き出されたものであったように。フェードルの口から放出された愛の毒は、出発点に実際の毒となって戻ってきたこと

113 Thomas CORNEILLE, *Circé*, acte III, scène iv, p. 673.
114 QUINAULT, *Thésée*, acte V, scène iii, p. 65.

になる。この出発点に戻った時の毒が、毒·薬の連鎖反応を最終的に止めるのだ。

この愛という毒を告白したがゆえに、毒を飲まなければいけなくなったフェードルの口こそ、ヴェニュスが罰しようとした太陽神の口、女神の不義の愛を告げ口した口である。女神は太陽神の口から出た言葉を原因とする不幸に対し復讐しようとしたのだ。太陽神の孫娘のフェードルに、口から出る災いがいかなるものであるか感じさせる、そのために愛の毒矢を放ったのだ。それがヴェニュスの復讐だ。ラシーヌが『フェードル』に組み込んだ毒は、ヴェニュスの復讐を前面に押し出す仕掛けとなっているのだ。このことはラシーヌ以前のフェードルには見受けられない。彼女たちにもヴェニュスの呪いは降りかかっていることはいるが、剣が彼女たちの胸を貫いていた。

もう1つの毒、讒言について考えてみよう。讒言は、それがフェードルの命を救う薬となると考えたエノーヌによって行われた。エノーヌの口がイポリットの命を害したのだ。「何故おまえの不敬虔な口は、彼に罪を負わせ、彼の命を汚すことができたのだ[115]」とフェードルはエノーヌを非難している。しかし「私の献身はただあなたの沈黙のみを必要とするだけです[116]」とエノーヌがフェードルに言っていたように、フェードルの協力なくしてはエノーヌの毒·薬は効果がなくなってしまう。エノーヌの讒言という毒·薬が効果を発揮するためには、フェードルの口は閉ざされておく必要があった。毒が口から出るものならば、その対になる薬もまた口から出るものだからである。讒言という毒を中和するのは、真実を口にするという薬によってのみ可能となる。フェードルが口を開けば、エノーヌの薬の効果はなくなるのだ。だから、フェードルはイポリットを助けるために罪を告白することを望んだのだ。それがもっとも効果的な手段であることを彼女は知っていた。しかし、彼女はアリシーとイポリットの愛を知り、嫉妬に駆られ、真実を口にすることはなかった。そのため讒言という毒の効果は消えず、イポリットは死ぬことになる。讒言をしたのは確かにエノーヌだが、フェードルがそこに関与していなかったとは言えない。フェードルとエノーヌは共犯関係にあるのだ。

さて、愛の告白も、讒言もエノーヌがフェードルに与えた助言、(毒)薬であった。毒·薬の連鎖反応はエノーヌを触媒としておきているのだが、この反応もエノーヌの口から出た言葉によって起きている。また、エノーヌの口は、連鎖反応を引き起こすことになる言葉を最初に発していた。エノーヌが「イ

---

[115] *Ibid.*, acte IV, scène vi., v. 1313-1314. 傍点筆者。

[116] *Ibid.*, acte III, scène iii, v. 894.

ポリット」の名前を持ち出した時、フェードルは乳母を「なんという名前がおまえの口から出てきたのだ[117]」と叱責している。フェードルが日の光から隠しておかなければいけなかった愛を、この言葉が日の光の下に引きずりだしてしまったのだ。エノーヌはこの宿命の名前を口にしてはいけなかった。この悲劇では不幸をもたらすものは比喩の毒として、必ず口から放出されている。

フェードルと彼女の分身エノーヌの口から毒が放出されることと対照的に、イポリットは沈黙を守り続ける。口から出た毒に対しては、真実を口から語るという解毒剤しか存在しない。毒の被害を受けているイポリットこそ口を開かなければいけない人物であった。だが、彼は不義·近親相姦の愛という毒に対しても、讒言という毒に対しても、口を開くことはない。

フェードルの愛の告白を聞いたイポリットは茫然とするが、そのことをテラメーヌにすら隠す。

> イポリット
> テラメーヌ、逃げよう。僕の驚きは大きい。
> 恐れなくして自分自身を見ることができない。
> フェードルが…いや、神々よ、深い忘却のうちに
> この恐ろしい秘密が隠されつづけますように[118]。

またイポリットは、エノーヌの讒言を信じた父親に不義の愛情をフェードルに抱いたと責められたときも、沈黙を守ることを選んでいる。

> そのように汚らわしい嘘に、当然の怒りを覚え、
> 僕は真実に無実を語らせるべきなのでしょう。
> しかし、僕はあなたに関係する秘密を話したくないのです。
> 僕に口を閉ざさせている尊敬の念を認めてください[119]。

彼はテゼの名誉を守るため、口を閉ざしている。アリシーに何故テゼに秘密を打ち明けないのだと問われたとき、「僕は日の光の下に彼の褥の恥辱をさらさなければいけなかったのか[120]」と問い返している。

この悲劇で沈黙を守るのはイポリットだけではない。アリシーもイポリッ

---

[117] RACINE, *Phèdre et Hippolyte*, acte I, scène iii, v. 206.
[118] *Ibid.*, acte II, scène vi, v. 717-720.
[119] *Ibid.*, acte IV, scène ii, v. 1087-1090.
[120] *Ibid.*, acte V, scène i, v. 1340. 傍点筆者。

トと同じように行動するのだ。イポリットの秘密は、アリシー1 人が見抜いていた。神々の、太陽の光の加護を受けている2人の恋人達は、言葉で言わなくとも、その奥を見抜くことができる。アリシーの腹心のイスメーヌが言うように「語る言葉がなくとも、眼が語る[121]」のだ。イポリットとアリシーが口を開くのはお互いの愛を「虚言には容赦のない寺院[122]」で愛を誓おうというときだけである。彼らには婚姻の松明が灯されることはない。「婚姻はいつも松明に囲まれてするものでもない[123]」とイポリットは言うが、彼らには松明の炎など必要ではない。フェードルの不義の愛の炎と異なり、彼はこの愛を「もっとも神聖なる神々の名前にかけて誓う[124]」ことができるからだ。その愛は、神々の認めるもの、太陽の光に照らされるものであった。イポリットは神々の前でその愛を誓うときにのみ口を開くのであって、フェードルの穢れた愛の炎を語るために口を開くことはなかったのである。また、彼はアリシーにも秘密を守るように要求している。穢れを知らぬアリシーの口は毒の話をしてはいけないのだ。

> できるなら、僕が話したということを忘れてください。
> そのように純粋な口が
> この恐ろしい出来事を語るために開かれてはいけないのです[125]。

このため一度はテゼにイポリットの秘密を話し彼を救おうとしたアリシーも口を閉ざしてしまう。「私は彼の慎みを真似し、あなたの前を去ります。沈黙を破ることを強制されないように[126]」とアリシーはテゼに告げ、舞台を去る。もし、このときアリシーが語っていたならば、イポリットが死ぬことはなかったかもしれない。フェードルとエノーヌが口を開くことによって、毒をばら撒いていたのに対して、イポリットとアリシーは口を開かないことで犠牲者となった。沈黙こそがイポリットが死ななければいけなかった原因である。この沈黙のため、テゼと彼の間にある誤解は最後まで解けることがなかった。口から放出された毒に汚染されたとき、その効果を止めるためには、語らなければいけない。口を開かなければ、毒は体の中に留まったままだ。テゼに、もしくはテラメーヌに、フェードルの不義の愛を語っていれば、イ

121 *Ibid.*, acte II, scène i, v. 414.
122 *Ibid.*, acte V, scène i. v. 1394.
123 *Ibid.*, v. 1391.
124 *Ibid.*, v. 1403.
125 *Ibid.*, v. 1348-1350.
126 *Ibid.*, acte V, scène iii, v. 1449-1450.

ポリットは死ぬことはなかっただろう。イポリットはみすみす機会を失っていたことになる。このラシーヌの世界では、黙ることは死を意味する。イポリットはフェードルの不義・近親相姦の愛の告白に対しても、エノーヌの讒言に対しても沈黙を守ったことにより死ぬ。父の呪詛により海から現れた怪物はイポリットの死の表面的な原因でしかない。彼は愛の毒、讒言の毒にかかって死ぬのだ。

イポリットを殺してしまったことを後悔するフェードルは死を決意する。彼女は罪を告白し、死ぬのだが、その時に「剣がすでに私の運命を断ち切っていたでしょう[127]」と言っていた。しかし彼女は毒を飲むことを選択した。ラシーヌのヒロインは、死者の国にまで愛するものを追いかけていこうとする神話のフェードルではなく、自分の罪を後悔し死んでいくフェードルへと変容していた。また、フェードルの飲むメデの毒は、この悲劇の中心に存在する毒･薬の悪循環を断ち切るものであった。この意味において、この毒は薬として役に立っている。だが、すでにイポリットは死んでいる。フェードルにイポリットを蘇らせることはできない以上は、この最後の毒・薬も彼女の不義･近親相姦と讒言の毒の効果を完全に打ち消すことはないだろう。この毒が完全な薬になることはありえないのだ。最後の毒ですら毒･薬としての両義性を失っておらず、曖昧なものとしてある。

メデの毒の効能を調べることにしよう。まず毒のおかげで、彼女にイポリットの無実を証明する時間が与えられていた。剣と異なり、毒は遅延性を特徴とする。毒を飲んでから、舞台に現れるフェードルは命をかけ、自らの罪を告白した。恋という毒がフェードルの胸の内に点けた炎を、メデがアテネにもたらした液体の毒は完全に消しさるものであった。また、毒による彼女の死は、日の光に明るさを取り戻させている。世界は、この最後の毒･薬のおかげで清められるのだ。

すでに私の心臓にたどり着いた毒は、
この死につつある心臓に今まで知らなかった冷たさを流し込む。
すでに私はかすみを通してしか、
私の存在によって汚されている天と夫を見ることができない。
死は、私の眼から明るさを奪い、

---

[127] *Ibid.*, acte V, scène vii, v. 1633.

私の眼が汚していた日の光に、純粋さを取り戻させるのだ[128]。

彼女は死者と生者を隔てるかすみの向こう側へと移り、暗い世界への途上にある。残されたテゼたちは今、光の中にいる。彼女の死によって、日の光は純粋さを取り戻す。日の光、すなわち太陽の光である。ヴェニュスによって太陽の一族にかけられた呪いは毒の力によって解けたのである。

メデの毒は、フェードルが人間の「眼によって汚していた日の光」に純粋さを取り戻させる。この「眼によって汚していた日の光」という表現においても、ヴェニュスの復讐が問題となっているようだ。ヴェニュスがどのように復讐するか思い出そう。恋の女神は復讐のためにアムールの毒を塗った弓矢を用いる。これがフェードルを傷つけた。この矢(trait)は視線(trait)に繋がっていく[129]。フュルチエールの辞書によると« trait »という単語は、「矢」から転じて「比喩的、詩的に視線。その視線が愛情を生み出すときには、それが心につくる傷のことをいう」とある。ヴェニュスの呪いによって毒に犯されていたフェードルは、彼女自身が毒を振り撒くものになっていた。エノーヌの助言に従う彼女は、不義・近親相姦の愛の告白という毒を口から放出するだけでなく、視線という毒矢も放つようになっていたのだ。ヴェニュスの毒矢と違い、愛を生み出さない彼女の視線は、ただ毒を撒き散らす。太陽の口から出た災いに苦しんだ女神は、フェードルに口からでる災いの苦しさを味あわせるのみならず、フェードルの視線が日の光を汚すことを望んでいた。ヴェニュスは太陽が女神の不義の愛を見て、喋ったことを恨んでいたのだ。見ること、喋ることによって、太陽の一族は罰せられる。実際、フェードルの不義の愛は、ヴェニュスの放った毒矢によって傷つけられたことによって生じていたものだが、この愛(毒)は、彼女がイポリットを見たときに生まれている。イポリットを見たために、彼女は愛の毒に苦しむことになるのだ。

私は彼を見た、私は顔を赤らめた、彼の姿に血の気が引いた、
私の乱れる心のうちに、混乱が起きた。
私の眼は何も見えなくなった、私は喋れなくなった、

---

128 *Ibid.*, v. 1639-1644.

129 ラシーヌの演劇における視線の力関係については Jean STAROBINSKI, *Racine et la poétique du regard*, in *L'œil vivant*, « Collection Tel », Gallimard, 1961, 1999, pp. 71-92 を参照。

私は体が凍え、燃え上るのを感じた[130]。

この引用箇所は、彼女が受けた毒が、まず眼と口を襲ったことを明らかにしている。ヴェニュスの復讐の一環であるイポリットの魅力(charme)は、彼女の目から侵入し、フェードルを傷つけ、不義の愛という毒に苦しませる。この毒が、エノーヌを触媒として毒・薬の連鎖反応を始めるのだ。後にエノーヌの薬の無力さが判明したとき、フェードルは乳母のことを助言により「毒を盛った」と非難すると同時に、「私はイポリットを避けていたのに、おまえが私に彼を見させたのだ[131]」と非難してもいる。見ることにより、最初の毒が作られる。そして、その毒はやがて眼から口から放出されていく。

『フェードル』の悲劇の遠因は、太陽神がヴェニュスとマルスの不義の愛を見て、それを神々に告げ口したことにあった。ヴェニュスは太陽神の口から出た災いを恨み、復讐することを決意する。その復讐は、太陽神の一族の最後の娘に見ること、喋ることによる毒、その苦しみを与えようというものであったのだ。実は、この女神、同じ復讐を太陽神に対してすでにしている。オウィディウスの『変身物語』巻4によると、「ウェヌス女神は、この密告を忘れないで、仕返しを果たします。秘密の恋をもらした神を、逆に、同じ恋で痛めつけ[132]」ているのであった。ヴェニュスは太陽神が新たなる炎に燃えて、ルーコトエ(レウコトエ)を愛させるようにした。全てのものを見るはずの太陽神は、ルーコトエだけを見つめるようになる。女神は太陽神の恋人クリチー(クリュティエ)の嫉妬心を芽生えさせる。嫉妬に燃えるクリチーは、太陽の秘密の愛をルーコトエの父オルカモスに告げてしまった。気性の荒いこの父親は、ルーコトエを生きたまま埋め、殺してしまう。ヴェニュスの復讐が、フェードルに対するものと全く同じものであることに注意しなければいけない。フェードルがイポリットを見て、不義の愛に苦しむようになったように、まず太陽神は、見ることによって愛の苦しみを知る。そしてエノーヌの讒言によりイポリットを失ったように、クリチーの密告という口から出る災いによって愛するルーコトエを失う。ラシーヌはこの構造すらも、毒・薬の連鎖反応を用いることによって、『フェードル』の中に取り込んでいたのである。エノーヌの讒言はフェードルを救おうとしたためのものであり、嫉妬によるものではなかったが、エノーヌとクリチーは結果的にフェードル

---

130 RACINE; *Phèdre et Hippolyte*, acte I, scène iii, v. 273-276.
131 *Ibid.*, acte IV, scène vi, v. 1312. 傍点筆者。
132 オウィディウス、『変身物語』(上)、中村善也訳、岩波文庫、1981 年、p. 146。

と太陽神を口から出る災いで苦しめた点で同じ役割を果たしている。エノーヌもクリチーもヴェニュスの復讐に振り回されていた。ヴェニュスの復讐において、讒言、密告は太陽神の一族の愛するものを失わせる。『フェードル』において、ヒロインが讒言をせずに、乳母がそれをおこなうことは、ラシーヌが言うように、讒言のような卑劣な行為は乳母がするのが相応しいということも確かにあるだろうが、それ以上にヴェニュスの復讐には、フェードルが讒言の毒による災いを味わうことが必要であったのだ。そのためには、神話のフェードル達のように、彼女自身に偽りの報告をさせるわけにはいかなかった。乳母の役割は極めて重要なものであるのだ。さて、讒言をする役割を担った乳母エノーヌは、太陽の孫娘フェードルに捨てられ、海に飛び込み自殺する。ルーコトエの死後、悲しみに暮れる太陽神に捨てられたクリチーは、狂女のごとくなり、何も食べず、ただ太陽を見つめながら死んでいった。彼女は菫によく似たヘリオトロープの花になったという。ドノー・ド・ヴィゼがこの神話をもとに『太陽神の愛(1671年)』を書いている。1670年代に『アリアーヌ(1672年)』『バッカスの結婚(1672年)』『テゼ(1675年)』『シルセ(1675年)』『フェードルとイポリット(1677年)』と太陽の娘たちを主人公に据える芝居が多いことを見逃してはいけない。これらの主題は、1670年代に入り流行し始めたオペラによく合うものであったようだ。また、太陽王の治世の下ということもあり、観客は太陽の神話に親しんでいたのだ。

『フェードル』における毒の使われ方は、この悲劇の隠された主題がヴェニュスの太陽の一族に対する復讐にあることを明確にしている。エウリピデス以来、この神話は愛の女神ヴェニュスに反発するイポリットに対する女神の呪いを軸としていたが、『フェードル』では太陽の一族の娘フェードルに対する女神の呪いに焦点が移っている。女神は太陽の密告する口を恨んでいるため、この悲劇は口からでる讒言の毒・薬を巡るものとなっていた。太陽の娘はこの毒に苦しまなければいけなかったのだ。

結論

『フェードル』において、毒はただの毒ではない。その後ろには当時流行していた太陽の娘たちに関する神話が控えていた。その神話を含めて、読みなおしたとき、『フェードル』は毒の悲劇として読むことが可能になる。

「メデの毒」というとき、その後ろにはメデの神話、エノーヌの神話、ヴェニュスの復讐に関する神話などが控えている。ラシーヌは毒・薬という連鎖

反応を登場させることによって、それらの神話を『フェードル』に取り込むことに成功していたのだ。そのため、フェードルの死はフェードル個人の死ではなくなっている。宿命にとらわれた、彼女の死は神話的大きさを獲得しているのである。

さて、この毒の出現はイポリットの悲劇の伝統から逸脱するものであったが、その逸脱も実は伝統にそったものでしかないということも分かった。作品の中で、伝統から逸脱する要素を持ち出すとき、ラシーヌは必ず他の伝統の中にその根拠を求めていた。彼は意識的に、その操作を行っているのだが、例えば、アリシーの名前についても、彼はその根拠を序文で述べなければいけないと感じていた。

> このアリシーは私が作り出した人物ではない。ウエルギリウスによれば、アスクレピオスによって蘇ったあと、イポリットは彼女と結婚し、その間に息子が1人生まれたのである。そして、イポリットがアリシーという高貴な出身のアテネの若い娘と結婚しイタリアに連れてきたこと、イタリアのある小さな村の名は彼女の名前をとったものだということを何人かの著者が述べているのも私は読んだことがあるのだ[133]。

ラシーヌは伝統から逸脱する。しかし、その逸脱も伝統から得られるものであり、その逸脱は作品により神話的な厚みを与えているものであることを、この悲劇における毒の使われ方が証明しているのだ。

[133] RACINE, Préface de *Phèdre et Hippolyte*, p. 818.
このアリシーであるが、ラシーヌと同時に同じ主題の『フェードルとイポリット』を上演させたプラドンもイポリットの恋人の名前をアリシーにしている。彼はこの名前をギリシアの弁辞家フィロストラート(ピロストラトス)の『絵画』から着想を得たと言っている(PRADON, Préface de *Phèdre et Hippolyte*, in *Théâtre du XVIIe siècle*, t. III, éd., Jacques TRUCHET et André BLANC, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1992, p. 96)。ヴィジュネール(Blaise de VIGENÈRE)訳によるフィロストラート(PHILOSTRATE)の『絵画 *Les images ou tableaux de* platte *peinture*』は16,17世紀によく読まれていた。